

○今日のテーマ

「ドガの人生と作品を探る」

○簡単にオンライン用のお名前と地域など教えてください。

○「ドガ」について何か知りたいことありましたらお聞かせください。

エドガー・ドガの生涯



1

誕生、そして
伝統の受容と展開
0~35歳
1834~1869

- ・1834年0歳・パリに生まれる。
- ・1845年11歳・リセ・ルイ=ル=グランに入学。
- ・1853年19歳・3月バカロレア(大学入学資格試験合格)。4月・1858年23歳・ローマでモローと会う。模写の登録
- ・1855年・21歳・パリ国立美術学校に入学。ドミニク・アングルのアトリエ訪問。
- ・1857年22歳・イタリア旅行へ。ローマに滞在。
- ・1858年23歳・ローマでモローと会う。
- ・1862年28歳・ルーブル美術館でマネと出会う。

2

技術の追求と
独創性
36~48歳
1870~1882

- ・1870年36歳・サロンに2点出品し賞賛を受ける
- ・1871年37歳・清仏戦争から復員
- ・1872年38歳・ロンドンの画廊で3点売れる。
- ・1873年39歳パリに戻りピサロ・モネ・ルノアール・シスレー・セザンヌらと共同出資会社に参加
- 1874年40歳・第一回印象派に出品
- 1876年42歳・第二回印象派に出品・マラメメが賞賛
- 1878年・公的コレクションに入る
- 1881年・47歳第六回印象派に出品

3

多彩な
メディアと実験
50~61歳
1884~1895

- ・1884年50歳・マネの作品3点購入する。
- ・1885年51歳・ディエップ近郊に滞在。ウォルター・バーンズが「ドガ礼賛」の撮影
- ・1886年61歳・第8回印象展に出品この頃ゴーギャンと親交。
- ・1895年34歳・ゴーギャンの作品8点購入。療養のためオーペルニュー地方を訪れる。この頃コダックの小型カメラで積極的に撮影する。

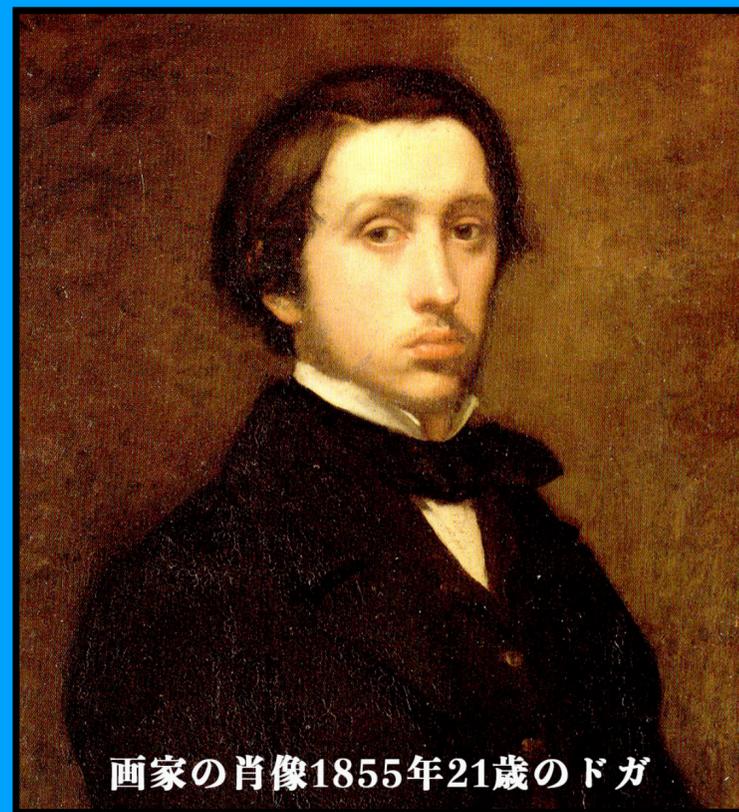
4

多彩な
メディアと実験
62~83歳
1896~1917

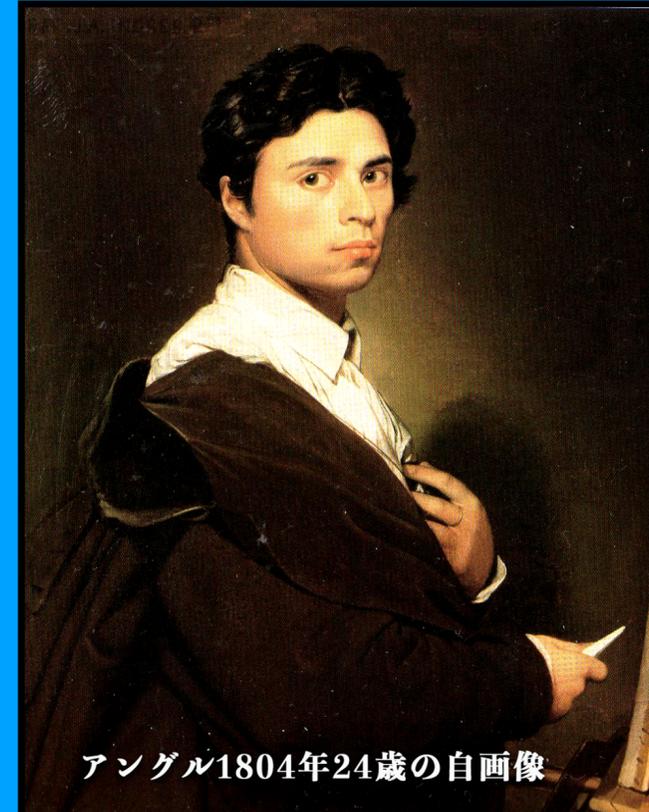
- ・1896年62歳・カイユボットの寄贈により作品7点がリュクサンブール美術館に收藏される。
- ・1911年77歳・ハーバード大学フォッグ美術館でドガの個展開催。
- ・1914年80歳・ルーブル美術館にドガの作品を中心としたカモンド・コレクションが收藏。
- ・1917年83歳・9月27日脳溢血で死去。モンマルトルの墓地に埋葬

①-1(1834~1869年・0歳~35歳)古典美術から印象派へ

この時代のドガ



画家の肖像1855年21歳のドガ



アングル1804年24歳の自画像



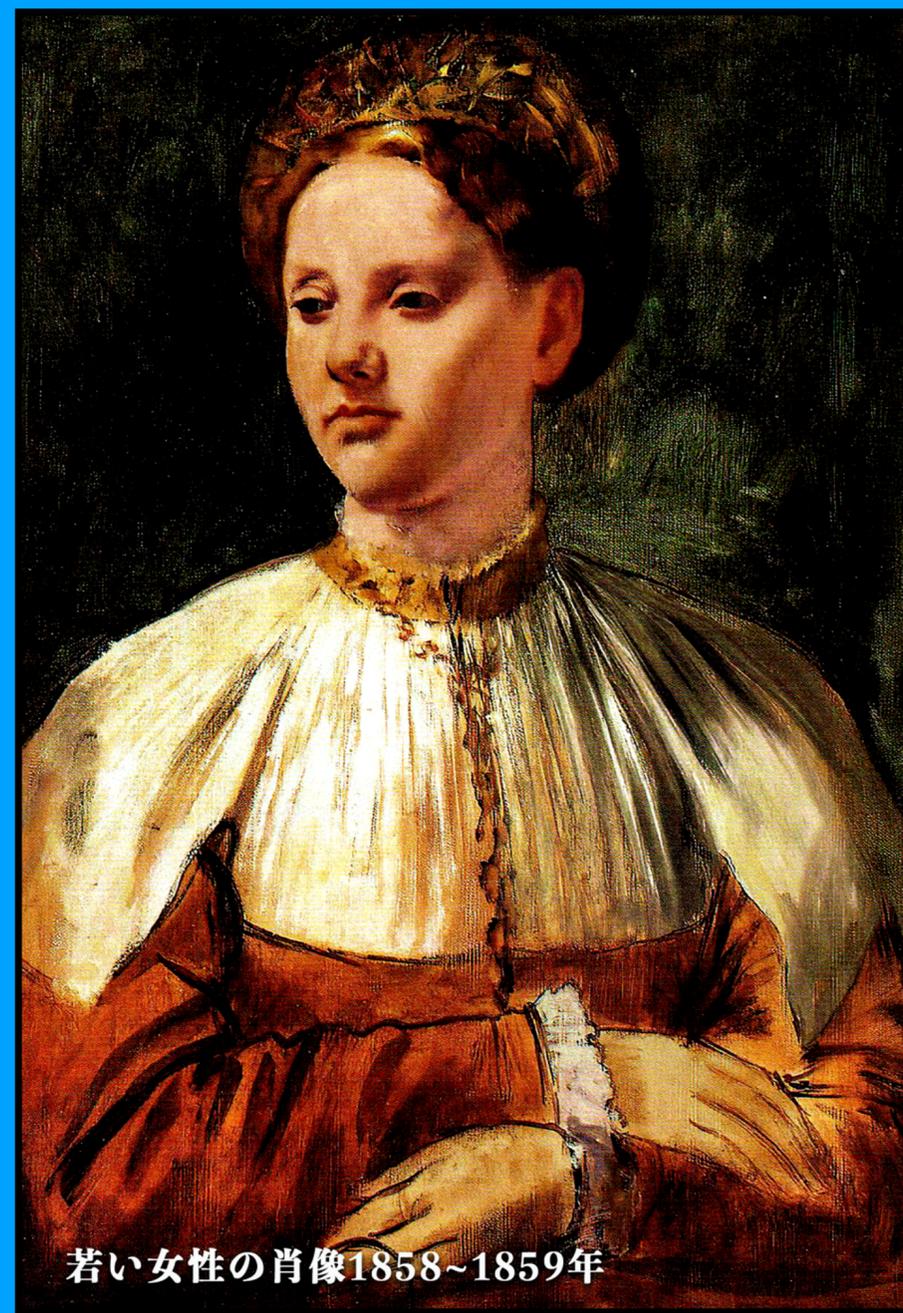
○エドガー・ドガ（1834~1917）はいかなる画家なのか。・・・十九世紀フランス絵画史におけるレアリストか印象派か、古典主義者か近代主義者か、デッサンの名手か色彩画家か。考えていくと、多くの両義性を抱えた芸術家であることがわかってくる。一般には、オペラ座の踊り子を描いた画家というイメージが強いかもしれない。しかし、それはドガの一面に過ぎない。若い頃、国立美術学校で正規の美術教育を受けたドガは、次いでイタリアに滞在し、古典美術を徹底して学んだ。絵画の伝統やデッサンへのリスペクトがあり、初期には歴史画にも挑戦している。けれども、ドガはアカデミックな画家を目指したわけではない。当時評価されていた作品とは主題や様式の異なる、斬新な絵画を常に探求した。逆に、ドガが批判したのは陳腐で凡庸なものであり、冷静で機知に富む辛辣な皮肉屋にもなった。

一八三四年	〇歳	七月十九日、パリにて誕生
一八四五年	十一歳	リセ・ルイール・グランに入学
一八五三年	十九歳	三月、バカロレア(大学入学資格試験)に合格 四月、ルーヴル美術館で模写の登録
一八五五年	二十一歳	四月、パリ国立美術学校に入学。ルイ・ラモートに師事 五月、ドミニク・アングルのアトリエを訪問
一八五六年	二十二歳	七月、マルセイユから初のイタリア旅行へ。十月までナポリに、翌年七月までローマに滞在
一八五七年	二十三歳	八月、ナポリに滞在し、その後ローマに戻る。ローマでギュスターヴ・モローと出会う
一八五八年	二十四歳	七月、ペルージア、アッシジ、アレツツオなどを経て八月、フィレンツェへ到着し、八ヶ月滞在する。《家族の肖像(ベレッリ家)》(10頁)を制作
一八五九年	二十五歳	四月、パリへ戻る
一八六〇年	二十六歳	三月、再びイタリアへ。 四月、ナポリからフィレンツェへ。ベレッリ家に滞在
一八六二年	二十八歳	四月、ルーヴル美術館でエドゥアール・マネと出会う
一八六五年	三十一歳	五月、《中世の戦争の場面》(15頁)をサロンに初出品
一八六七年	三十三歳	四月、サロンに《家族の肖像(ベレッリ家)》ともう一点を出品
一八六八年	三十四歳	マネ、モネ、ピサロ、ルノワール、ゾラらが常連だったカフェ・ゲルボワに通うようになる
一八六九年	三十五歳	五月、《E. F. 嬢の肖像、バレエ「泉」をめぐって》(24頁)をサロンに出品 ベルト・モリゾと親しくなる

①-2(1853~1869年・十代後半から三十代前半)



○ こちらは画家というより、堂々たるブルジョワ紳士としての自画像・29歳。イタリア留学も終えて30歳に近づき、やや自信が芽生え始めた頃であろうか。手袋とシルクハットを右手に持ち、こちらに向かって挨拶するかのようになつてエレガントなポーズをとる。背景は壁とも風景とも見える曖昧さがあり、未完成のままなのかもしれない。ティツィアーノなど16世紀イタリアの人物画を吸収した成果もうかがえる作品である。

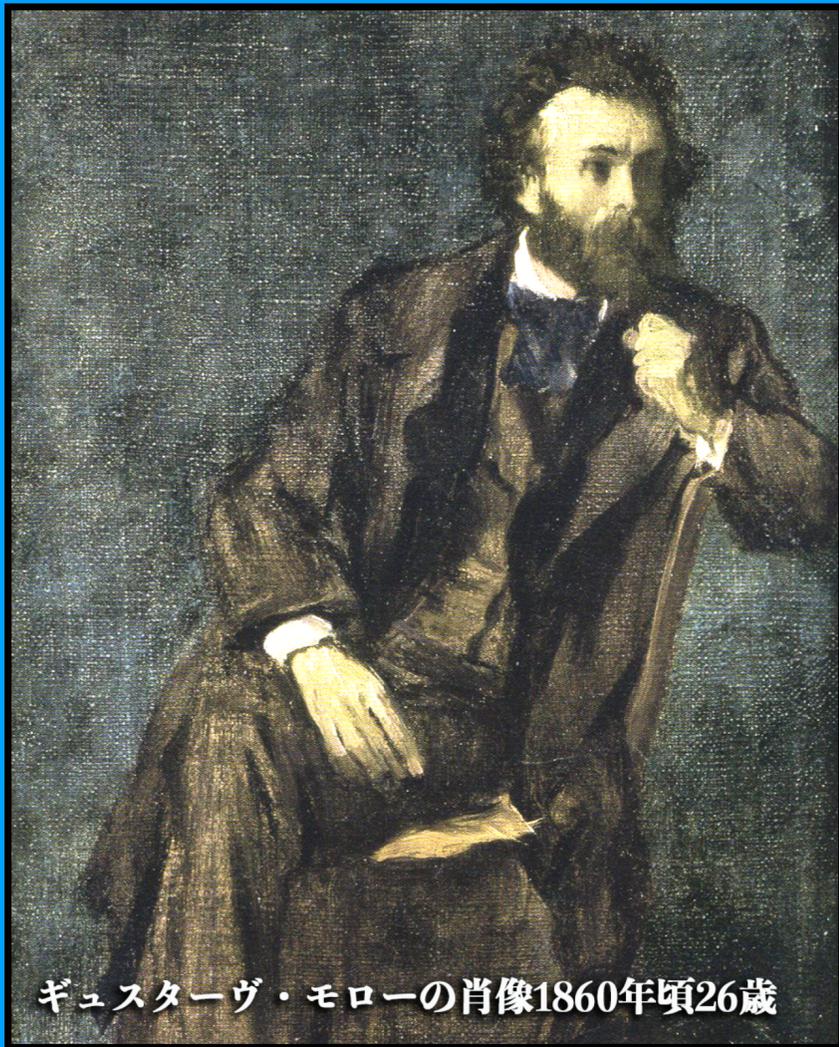


○ 若い女性の肖像・・・1858-59年頃8(24~25歳)で現在知られるドガの模写は約500点で、1853年から1861年の間に制作されたものが大部分を占める。模写の対象となる作品は、古代から同時代まで幅広いが、特に力を入れたのが15、16世紀のイタリアの巨匠たちの絵画であった。しかも、単なる模写に留まらず、自らの試みや解釈を反映させているのが興味深い。本作はフィレンツェのウフィツィ美術館で見た、当時レオナルド・ダ・ヴィンチ作とされていた赤チョークの素描を下敷きにした、趣のある独自の油彩画で、ドガの発想と技術が光る。

画家の肖像(挨拶するドガ)1863年頃

①-3・1853~1869年(19~35歳)・ドガ

モローと、色彩との出会い



ギュスターヴ・モローの肖像1860年頃26歳

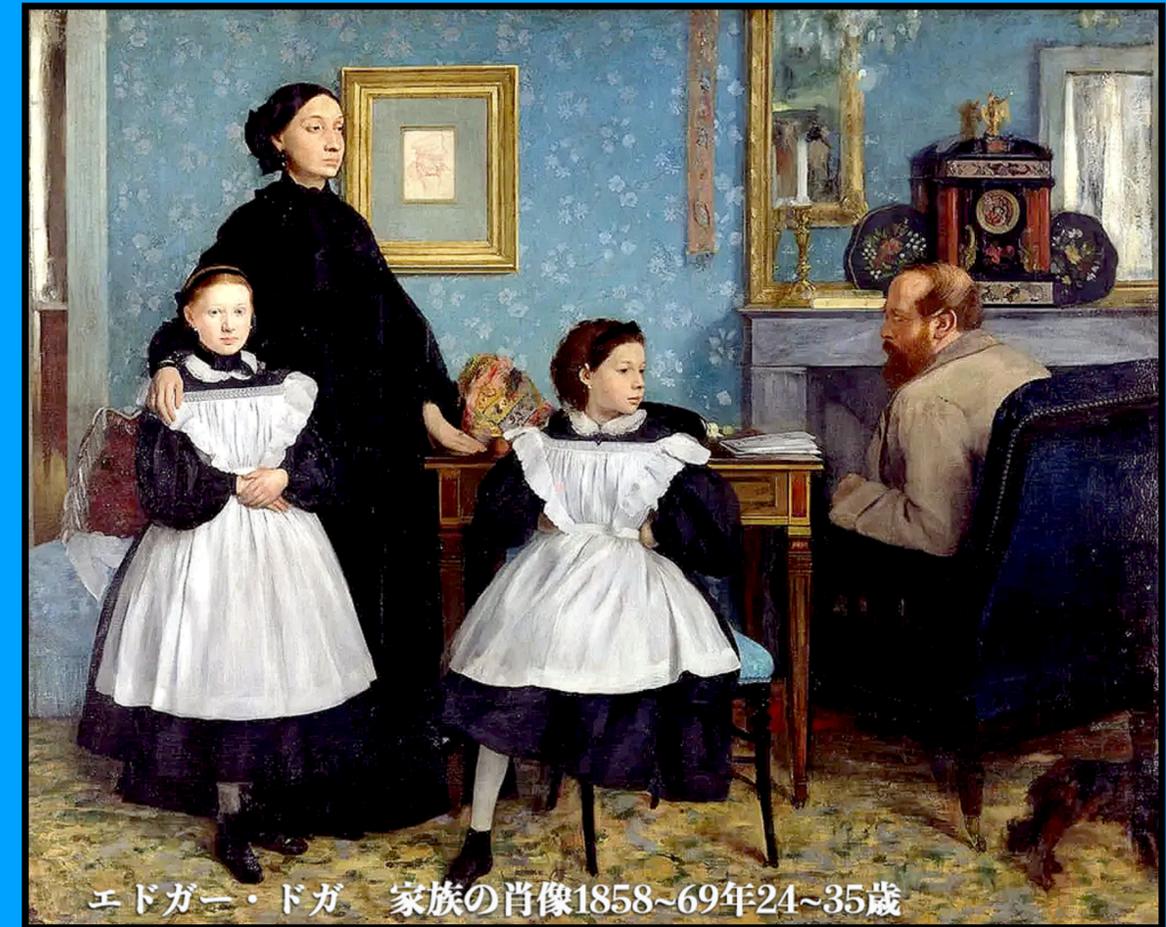
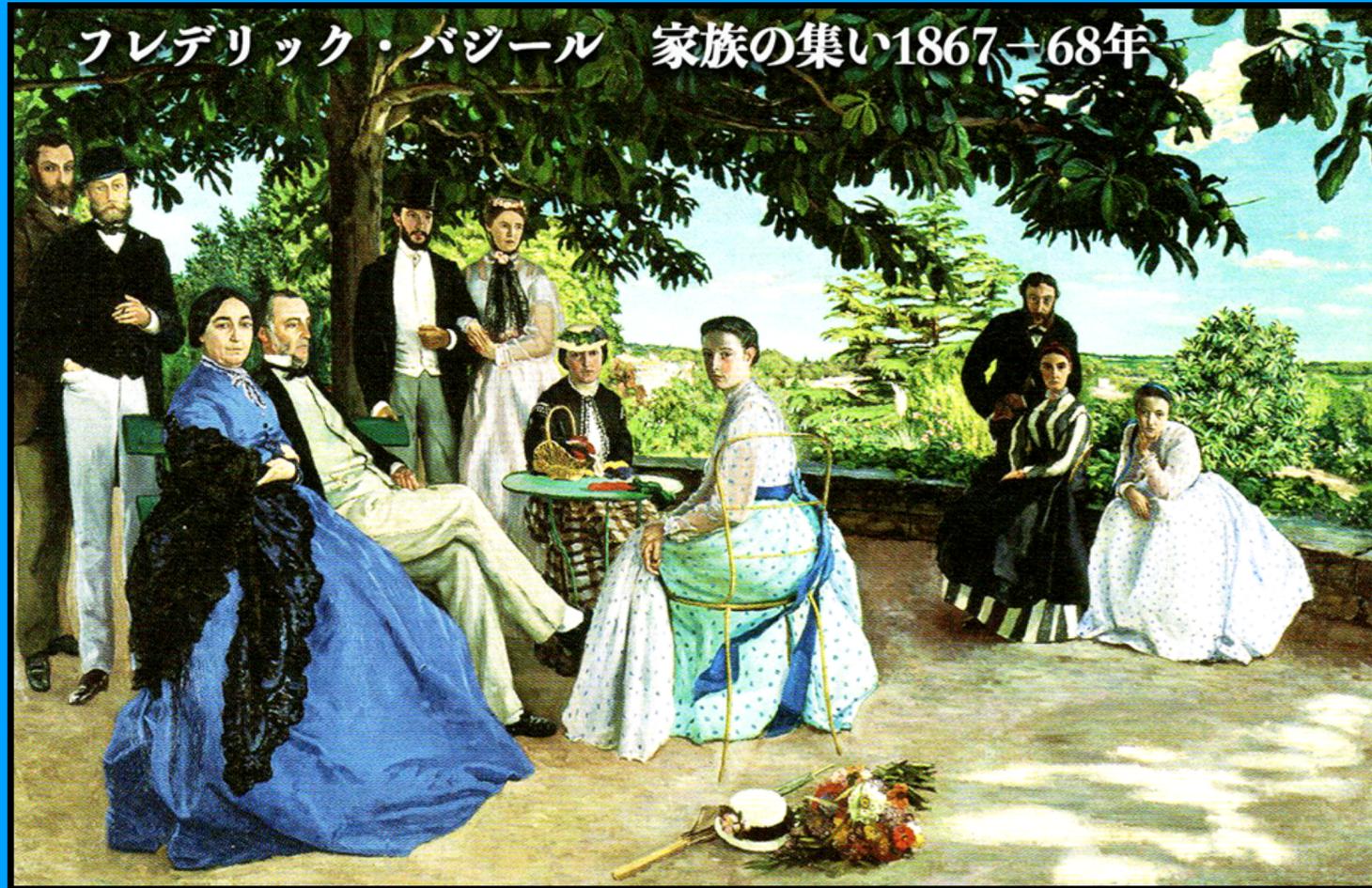


《エフタの娘》1859~60年頃25~26歳

○ **モローと、色彩との出会い**・・・19世紀フランスにおいて、画家たちはイタリアへの留学を夢見るのが常であった。イタリア美術は規範であり、それほど評価が高かった。国立美術学校の学生たちにとってはローマ賞コンクールという制度があり、第一席になればローマのフランス・アカデミー（ヴィラ・メデイチ）に五年間国費留学できたのである。ドガもまたイタリアに憧れたが、ローマ賞はさっさと諦め、1856年7月22歳から1859年4月25歳まで約3年、私費で長期滞在した。パリの富裕な銀行家の息子であったことに加えて、祖父がナポリで銀行業を営み（父がパリ支店を経営）、イタリアに拠点があったことも大きい。各地の美術館を訪れたドガは、古代の美術品やルネサンス、バロックの名作を模写して研鏡に務め、ときに自ら制作もした。

○ ドガに対するモローの影響は思想から技術にまで及んだが、とりわけ色彩に関してだと思われる。アングルを通してデッサンの信奉者となったドガは、色彩表現を探求していたモローとの交友に刺激を受け、色彩や動性表現にも目を開かされたのではないか。その成果は、《エフタの娘》1859~60年頃25~26歳）などに見られる。パリに戻ってから次第に疎遠になっていくが、イタリア時代のドガを励まし、色彩表現に目覚めさせたのは確かにモローであった。

①-5(1858~1869年(24~35歳))・近代の家族を描く



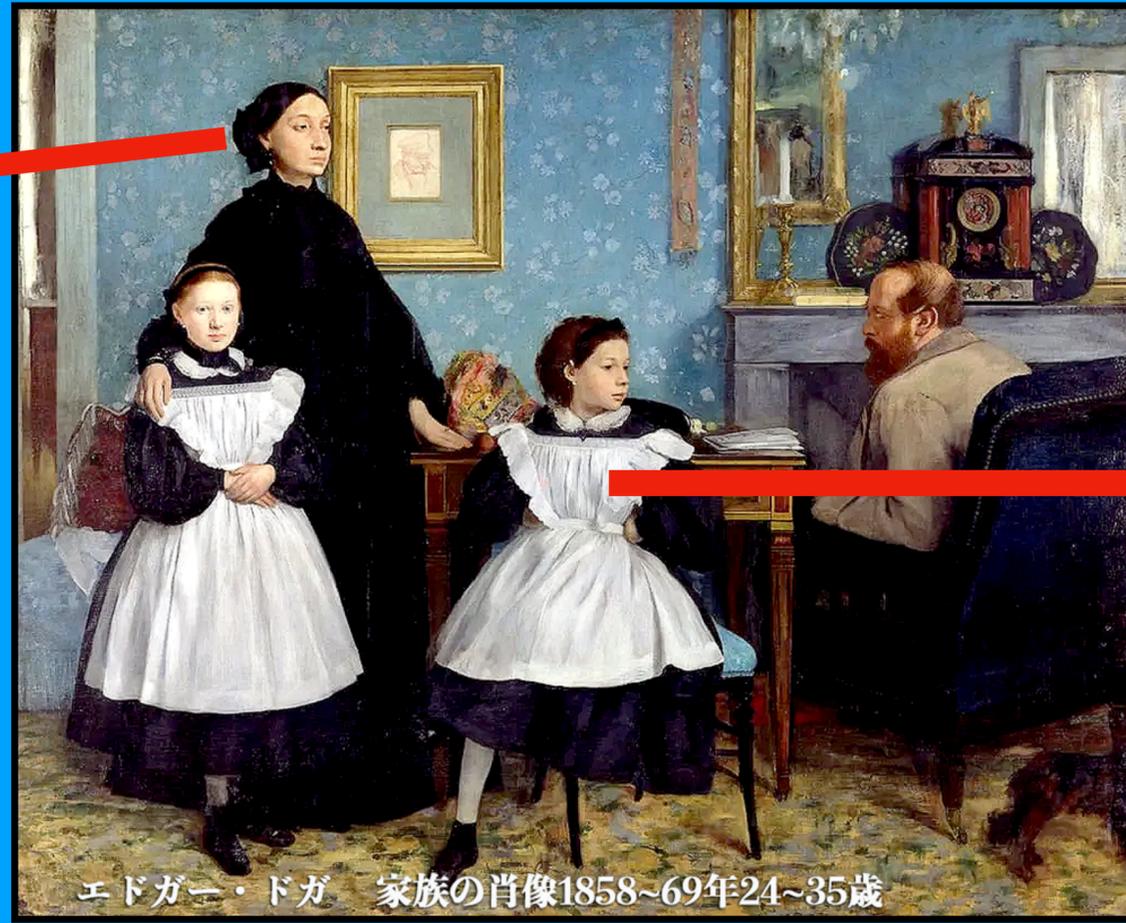
○ 西洋絵画に描かれてきた家族は、王侯貴族から市民、農民にいたるまで多岐にわたるが、近代以前においては一族の繁栄と継承を第一義とする家父長制の大家族であった。18世紀後半から個人の幸福に重きをおく夫婦と子供中心の小家族の考え方が出現し、19世紀の近代産業社会とともに優勢となり、個人の尊重と共同体の意識が合わさった新しい家族観が広まってきた。19世紀後半に制作されたフレデリック・バジールの《家族の集い》は、そうした近代の家族を表した典型的な集団肖像画にほかならない。ここには両親と子供たち、近しい親族たちが集い、各々の人格、個性がしっかりと描き分けられている。それでいて、互いの信頼関係と共同体の絆でゆるやかに結ばれ合っているのを感じられる。記念写真を撮るかのように描かれたこの作品は、幸福で象徴的な家族像といえるかもしれない。

○エドガー・ドガ 家族の肖像1858~69年24~35歳・・・フィレンツェ滞在中にドガが制作した、親戚の豪族を表す肖像画の大作である。画面の主役は叔母のラウラ・ベレッツリ、その長女ジョヴァンナと次女ジュリアが占め、右側にナポリから政治亡命した夫のジェンナロ・ベレッツリ男爵が背中を向けて座っている。1858年に制作を開始し、多くの習作や下絵を重ねて、1859年に帰国してからも制作を続け、最終的には1867年のサロンに《豪族の肖像》の題名で出品している。大きさからも内容からも、単なる肖像画を超えた野心作である。

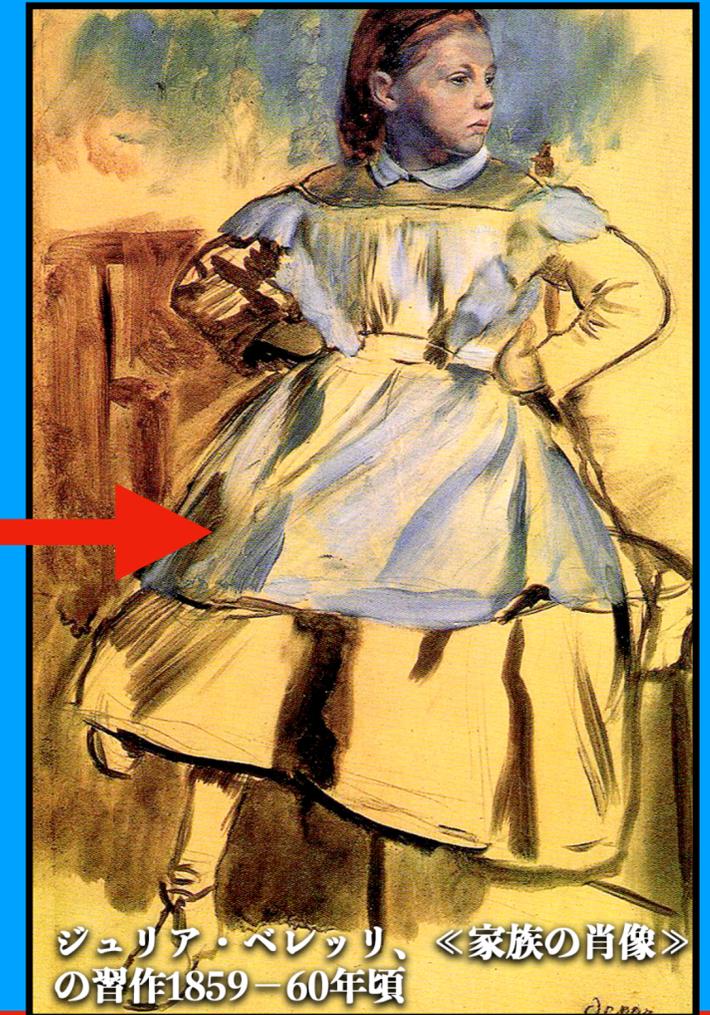
①-5(1858~1869年(24~35歳)・近代の家族を描く



ラウラ・ベレッリ男爵夫人の肖像
1858-59年頃24-25歳



エドガー・ドガ 家族の肖像1858-69年24-35歳



ジュリア・ベレッリ、《家族の肖像》
の習作1859-60年頃

○ ドガが信頼していた叔母ラウラは、1858年夏にドガをフィレンツェの住まいに招くが、父親のイレール（ドガの祖父）が11月に亡くなるまで二人の娘とナポリに留まったため、ドガは最初の数ヶ月を彼女の夫のベレッリ男爵とともに過ごした。《豪族の肖像》でラウラが黒ずくめの装いであるのは、まだ喪に服しているからであろう。彼女は健康状態が不安定で、精神的にも鬱状態になりがちだった。頭部デッサンの表情が固く、やや高圧的に見えるのは、自分をしっかり保つ必要があったからなのかもしれない。

○ 《家族の肖像》のために制作した個别人物習作の1点である。次女のジュリアはこの当時7歳、長女ジョヴァンナが10歳であった。ジュリアは年齢的にも性格的にもお転婆盛りともいふべき年頃で、片足を折り曲げて椅子に斜めに腰かけるあたりによく表れている。本作は木で裏打ちされた紙に揮発性の油で溶いた絵具で描かれており、頭部は丁寧に、身体はぎっくりと処理されている。ドガのデッサン力の確かさがわかる。

①-6(1858~1869年(24~35歳))

歴史画への挑戦

○ 歴史画への挑戦1850年代末から1860年代半ばにかけて、ドガは歴史画を四点制作した。近代画家として当初から歴史画を否定したマネとは違って、短期間とはいえ国立美術学校で正規の絵画教育を受けたドガは、当代一流の画家たちが目標とした歴史画に敢えて挑戦を試みたのである。結果から見れば、**正統的な歴史画とは似ても似つかぬものとなり、当時の基準からするとわかりにくい失敗作で、ようやくサロンに入選した四作目も反響がほとんどなかった。**端的に言えば、歴史画らしい内実を拒否した一種の反歴史画なのである。



バビロンを建設するセミラミス 1861年27歳

○ セミラミスは紀元前800年頃のアッシリアの伝説上の女王で、侍女たちを引ききれて、建設中の都市バビロンをテラスから眺める場面を表す。しかし、人物たちは正史画特有の劇的な身ぶりや英雄的なポーズは見せず、ゆるやかなリズムを醸すだけである。この極端に静的な構図は、《エフタの娘》とは逆の独自性を示す。なお、一書な習作や下絵を重ねた本作は、**ギュスターヴ・モローの様式**に近づくが、**ピエロ・テラ・フランチェスカ**などイタリア・ルネサンス絵画にも感化されている。



中世の戦争の場面 (誤題: オルレアン市の災厄) 1865年頃31歳頃

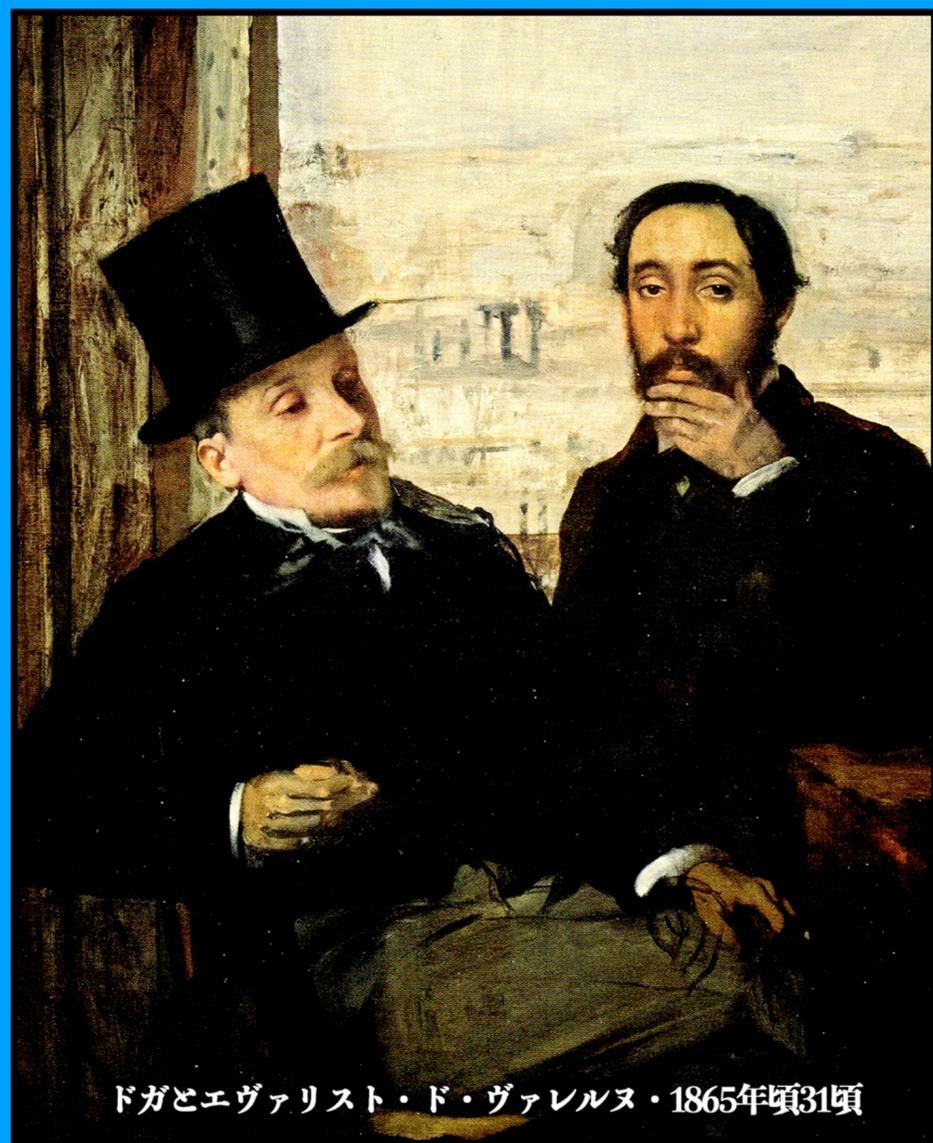
○ 南北戦争において、アメリカのニューオーリンズ (ドガの母方の親戚が住む) の市民になした北軍の残虐行為という同時代の事件を、中世の戦争場面という歴史的な文脈に移し替えて寓意的に表した**作中品**。裸体女性が酷い扱いを受けているのはそのためだが、**不均衡な人物配置、画面端でのモチーフの切断**は、後年のドガの構図を予告する。この**ドガ最後の歴史画**は1865年のサロンに出品されたが、**画風に共感した壁画家ビュヴィス・ド・シヤヴァンヌ**が称賛したのみであったという。

①-6(1858~1869年(24~35歳))

肖像画の探究-1

○肖像画の探

究・・・ドガには肖像画が多い。特に初期から前半期にかけて。1853年19歳から73年39歳までの20年間にドガが制作した作品100点あまりの内、約45点が肖像画であった。自画像を別にして、肖像画のモデルは家族、親戚、友人など、身近の親しい人物がほとんどで、自発的に描く場合もあれば、頼まれて制作する場合もあった。肖像画制作を通じて、ドガは人物表現の基本的な技術を身につけたと言ってもよい。肖像画制作で重要なポイントとなるのは顔と手である。



ドガとエヴァリスト・ド・ヴァレルヌ・1865年頃31歳



エドモンド・モルピッリ夫妻1865年頃31歳

○ドガによる1860年代の二点のダブルポートレートを見てみよう。《ドガとエヴァリスト・ド・ヴァレルヌ》では、ためらっているような、考えにふけているようなドガの雰囲気、目の動きとあごに当てた左手の仕草で表現されている。一方、《エドモンド・モルピッリ夫妻》では、二人の繊細な表情もさることながら、夫の堂々とした佇まいと両手の無造作な仕草が呼応し、右手を頬に左手を夫の一層に触れる妻の身ぶりが、夫に寄り添い、頼る妻の心理を示唆している。ダブルポートレートは二人の人物の関係を示唆する点も興味深い。

○ドガが友人の画家エヴァリスト・ド・ヴァレルヌと自分自身を描いた肖像画。絵画空間を斜めに前後にする形で二人の男性の姿が配置され、知人が事前に観る者に向けて、奥の方にいる作者が落ち着いたまなざしをこの構成は、ルーヴル美術館所蔵のラファエッロ作《画家と友人の肖像》(1518年頃)と共通しており、ドガがラファエッロ作品を参照した可能性は高い。本作のドガ像は画家にとって最後の自画像になった。

○ドガの年下の妹テレーズは、従兄(じゅうけい・自分より年上の、男性のいどころ)に当たるエドモンド・モルピッリ公と1863年に結婚し、イタリアに暮らしていたが、1864年に子供を亡くす不幸があった。結婚直後にドガが描いた肖像画ではテレーズが前面に出ていたが、本作では夫の影に隠れるかのように不安な様子を見せており、家庭状況の変化を感じさせる。様式的には、ティツィアーノなど16世紀イタリアの肖像画を学んだ成果も見られよう。

①-7(1858~1869年(24~35歳))

肖像画の探究-2

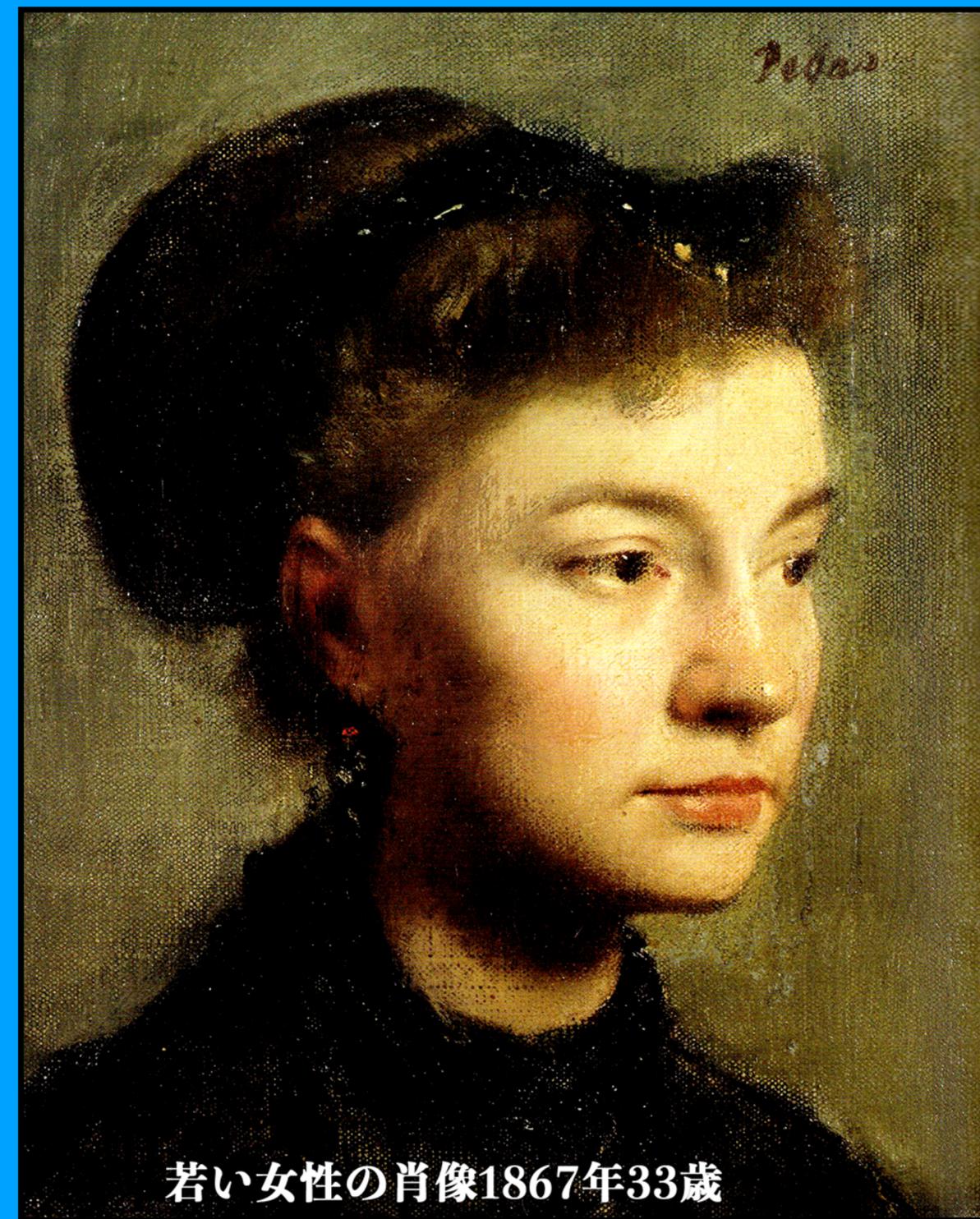


花瓶の側で肘をつく女性(誤題：菊のある婦人像) 1865年31歳



○ 若い女性の肖像1867

年・・・1860年代後半のドガは女性の肖像にも優品を残した。サイズは小さいものの、本作はドガの鋭い観察眼と的確な写実力をいかんなく示す。落ち着いた表情の中に、内に秘めた強い意志をかいま見せる**女性の顔を、繊細に表現している**。後にこの絵が1877年の第3回印象派展に出品されたとき、**批評家ジョルジュ・リヴィエールはその質の高さを絶賛している**。

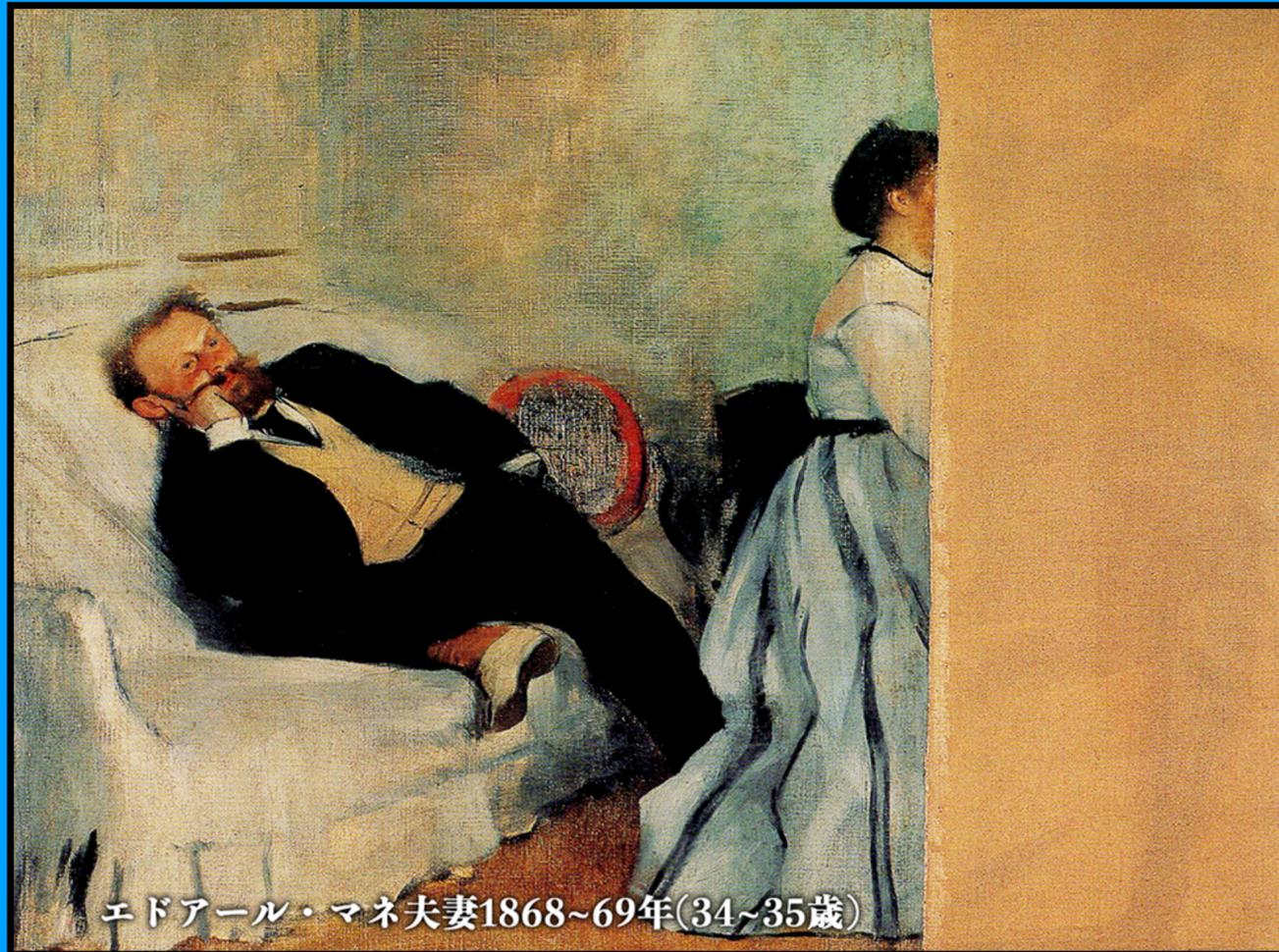


若い女性の肖像1867年33歳

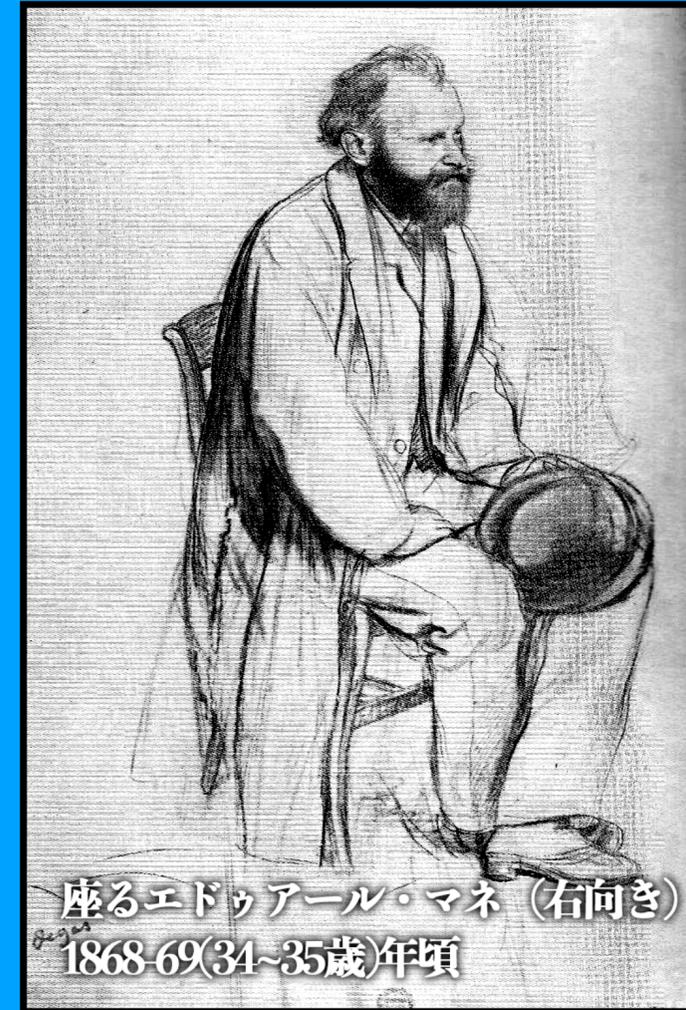
○ 花瓶の側で肘をつく女性(誤題：菊のある婦人像) 1865年31歳・・・夏の終わりの花々を生けた花瓶が中央にあり、その傍で女性が肘をつき、テーブルの逆側に水差しと手袋が置かれている。女性は、リセ時代からの親友ポール・ヴァルパンソンの妻の可能性が指摘されている。庭が見えるので、メニル＝ユベールのヴァルパンソン家に招かれたときの場面かもしれないからだ。ともあれ、クールベやミレーのように花と女性を一緒に描いても、**ドガの場合は女性の顔を花ではなく画面の外に向ける大胆な構図をとる**。観者の視線が定まらぬ面白い効果は、**後年のドガを彷彿とさせよう**。

①-7(1858~1869年(24~35歳))

マネとドガ



エドゥアール・マネ夫妻1868~69年(34~35歳)



座るエドゥアール・マネ (右向き)
1868-69(34~35歳)年頃

○マネとドガ1832年生まれのマネと、1834年生まれのドガは、年齢差わずか二歳。前者が法務官僚、後者が銀行家の父親を持ち、ともにパリの裕福なブルジョワ家庭で育った。上流市民階級出身で、革新的な前衛画家になったという点でも、二人は共通している。ドガは1862年頃28歳にルーヴル美術館でマネと出会って親交を持ち、二人は友人にしてライバル同士という関係になった。ともに、古典美術を尊重しても同時代のアカデミックな絵画は否定し、人物画家としてパリの現代生活を主題とした。斬新な造形性を追求した点でも共通するが、マネは平面的な彩色や筆触の効果に、ドガは大胆な構図や対象の動きを捉える表現に特徴を見せた。

○サロン（官展）への出品に生涯こだわったマネに対し、ドガがサロンを拒否し、印象派展を推進したことは大きな違いである。マネとドガの間にはライバル意識から来る緊張感があったが、互いの力を認め合っていたがゆえに、仲違いは修復された。1883年にマネが亡くなったとき、マネは「私たちが思っていた以上に偉大であった」と、ドガは述懐し、その芸術を改めて認めた。マネの死後、ドガがことあるごとにマネの作品を購入しているのはその証左であろう。

①-8(1858~1869年(24~35歳))

近代生活の断面

○1860年代末から1870年代初頭(20~36歳頃)にかけて、ドガは従来の人物画、風俗画に見られない問題作を描く。《室内》も《ふくれ面》も通常見かけるタイプの絵とはかなり異なる。近代都市パリの市民生活にさまざまな側面があるのは当然であるが、そのすべてが画題になるわけではない。暗い室内における陰鬱な男女関係を示唆する《室内》は、別題を思わせるような状況設定だとすればかなり異例な作品で、絵画で普通に扱うテーマではない。《ふくれ面》の方も、日常的にあり得る場面かもしれないが、絵画で好んで取り上げられるテーマとはいえない。



室内（別題：強姦）1868-69年(34~35歳)



ふくれ面1870年頃36歳

○室内（別題：強姦）1868-69年(34~35)・・・謎めいた不穏な情景を表す、ドガの中でも異色の作品である。若い女の部屋の中で、壁を背に男が立ちはだがJ、打ちひしがれた女を見下ろしている。女のむき出しの肩、テーブルの上のはさみ、蓋が開き白い布がはみ出した小箱などを、ランプの光が照らし出す、意味ありげで残酷に見える情景である。この劇的な場面は、ゾラの小説『テレーズ・ラカン』（1867年）に着想を得たのかもしれないが、ドガの造形的な関心は室内の微妙な明暗を繊細に描き分けることにあったようである。

○ふくれ面1870年頃36歳・・・《室内》と同じく説明しがたい、変わった内容の作品である。机の上で腕組みをする不機嫌そうな男性と、机に寄りかかって不満げにこちらを注視する女性がいて、二人の間には得体の知れぬ緊張感がある。まるで、事務所で険悪な口論をしていて、突然部屋に入って来た訪問者に迷惑と言わんばがJの視線を向けたかのようだ。しかし、状況は曖昧で決定的な解釈はなく、二人の関係も不明である（夫婦？父娘？）。壁にかかる競馬を表すイギリスの版画がドガの関心を示唆している。

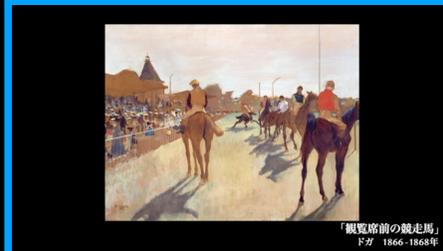
①-9(1858~1869年(24~35歳))

競馬場にて

○ 競馬場にて オペラ座の踊り子と並んで、競馬場の馬や騎手は画家ドガの主要な関心事であった。訓練された人間や動物の瞬間的な動きを捉え、意想外の姿勢や優美な躍動感を表現することに惹かれたからだ。ただ、それ以前に、競馬はブルジョワ階級の娯楽であり、社交の場でもあり、ドガが自ら親しんだ競馬を絵画の素材にするのに不思議はない。



行列 (別題: 観覧席前の競走馬) 1866-68年頃(32~34歳)



「観覧席前の競走馬」
ドガ 1866-1868年



田舎の競馬場にて1869年35歳

○ 観覧席前の競走馬1866-68年頃(32~34歳)・・・舞台となったのは、サン＝トゥアンのようなパリ郊外の競馬場と推定されている。暖かな日差しを浴びて、出走前の馬と騎手が観客の前を歩む場面である。疾走する競走馬を真横から捉えたジェリコーの激しい《エプソムの競馬》とはまったく異なる、のどかな世界がここにはある。それは競馬(場)を通じた市民生活の1コマとも呼べるような一面であり、身近な現実をカジュアルに描くドガならではの作品なのである。

○ 田舎の競馬場にて1869年35歳・・・親交のあったポール・ヴァルパンソンの田舎の邸宅から遠くない、アルジャンタンにある競馬場を舞台とする作品。馬車にはポールと妻、生まれたばかりの息子と乳母、飼い犬が乗っている。馬車と馬を画面右下で大胆に断ち切る構図は、ジャポニスムの例として指摘されることもある。本作は第1回印象派展に出品され、さして注目されなかったが、美術批評家エルネスト・シェノーは洗練された作品として称賛した。

③-1(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

○1870年代から1880年代半ばにかけて、ドガはもっとも充実した成果を生み出した。主題やテーマが広がり、様式や技法が多様化し、ドガらしいシャープで洗練された多くの作品が生まれた。絵画のみならず彫刻や版画も含めて、独創的な試みが行われたのである。すでに1860年代から、ドガがよく知るオペラ座や競馬場は画題となりつつあったが、1870年以降になると、さらに市民生活の断片的情景やさまざまな職業の女性たちもレパートリーに加わった。こうしてドガはマネと並んで、ボードレールのいう「現代生活の画家」となったのだ。

年	年齢	出来事
一八八二年	四十八歳	三月、第七回印象派展には出品せず
一八八一年	四十七歳	四〜五月、第六回印象派展に出品
一八八〇年	四十六歳	四月、第五回印象派展に出品 この年、スペインを旅する
一八七九年	四十五歳	四〜五月、第四回印象派展に出品
一八七八年	四十四歳	三月、ポー美術館が《綿花取引所の人々(ニューオリンズ)》(36頁)を購入。初めて公的なコレクションに入る
一八七七年	四十三歳	四月、第三回印象派展に出品
一八七六年	四十二歳	三月、第二回印象派展に出品 九月、マラルメが記事の中でドガを称賛
一八七四年	四十歳	四〜五月、第一回印象派展に出品
一八七三年	三十九歳	三月、パリに戻る 十二月、モネ、ピサロ、ルノワール、シスレー、セザンヌ、モリゾらと「画家・彫刻家・版画家等による共同出資会社」に参加
一八七二年	三十八歳	一月、デュラン・リュエルが初めてドガの作品を三点購入し、ロンドンの画廊で展示する 十月、パリを出発し、ロンドンを経由してニューオリンズへ
一八七一年	三十七歳	三月、復員 七月、パリに戻る 十月、ロンドンを訪れる
一八七〇年	三十六歳	五月、サロンに二点の肖像画を出品。批評家から初めて称賛を受ける 九月、普仏戦争にて志願兵として入隊

この時代のドガ



ル・ペルティエ通りのオペラ座の稽古場1872年36歳

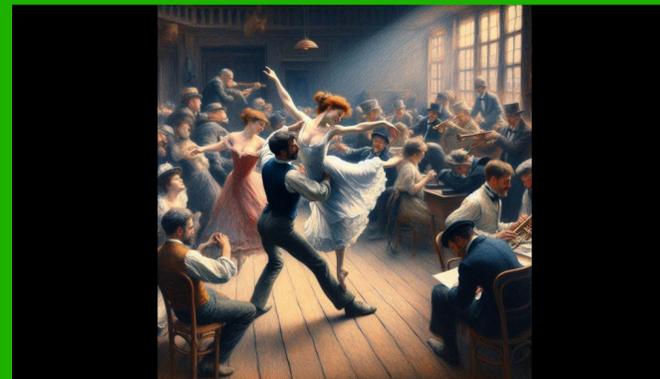
○初期のドガはル・ペルティエ通りのオペラ座へ通い、1875年からは、新しく建設されたオペラ座であるガルニエ宮に足を運んだが、**定期会員として自由に出入り**できるようになったのは**1885年以降**であった。ドガは1870年代初頭から舞台上の踊り子や稽古の場面など、バレエに関する多くの作品を制作した。本作では、バレエ教師の前で踊り子が片足を後ろに置くポーズをとっている。中央の鏡、左右の戸口などが絵画空間を複雑にしているのがわかる。

②-2(1870~1882年(36~48歳)・技術の追求と独創性

独自の探求と試行



バレエの授業1873年39歳



バレエの授業1873-76年39~42歳

○ **バレエの授業1873年頃39歳**・・・踊り子の群像構図で、多分に実験的だ。ドガの興味は複雑な空間の中に、多数の踊り子たちのさまざまなポーズを組み込むことにあると思われる。部屋の中央で腕を上げる踊り子たちを中心に、右手前の長椅子には支度をする者たちが集まり、右奥の練習室にも訓練に励む一団がいる。他方、左端の螺旋階段から連なって降りてくる踊り子たちは足のみ見せている。窓から差し込む光が、逆光の効果とともに彼女たちの姿に陰影を与え、全体を一つにまとめているのだ。

○ ル・ベルティエ通りのオペラ座において、バレエの振付師ジュール・ペローが踊り子たちを指導する場面。右奥に向かう対角線構図の中心にペローがいて、ポーズする踊り子に視線を向けるが、大きく扱われているのは左手前の二人の踊り子だ。一人は顔の前で広げた扇を持って立ち、もう一人は左手で背中をかいている。レッスンを待つ奥の踊り子たちの様子や姿勢もさまざま。稽古の場面に何気ない日常的な仕草の人物を組み込むことで再構成はリアルになる。

②-3(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

独自の探求と試行

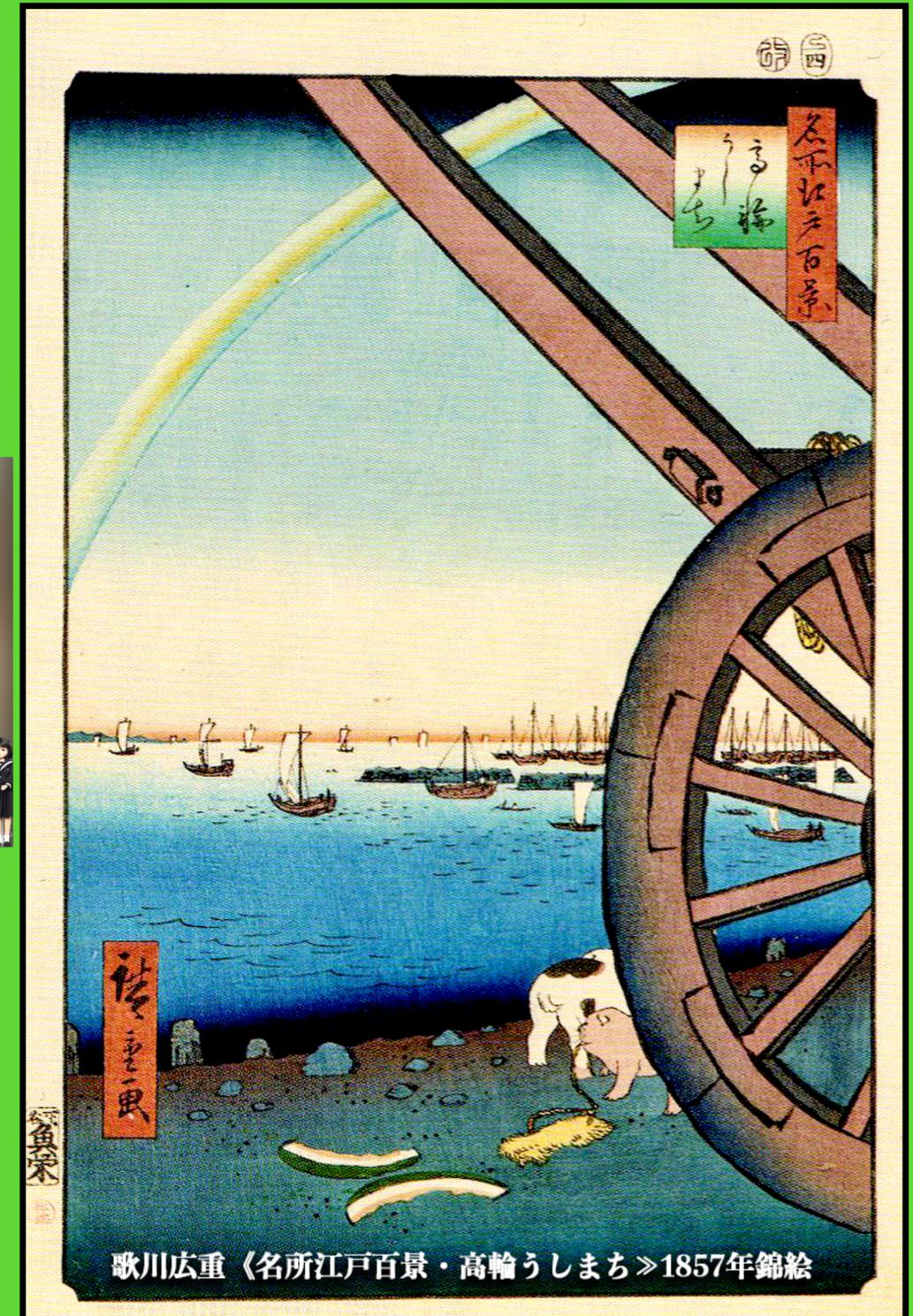


○ **舞台稽古1874年頃40歳**・・・舞台上でのリハーサルの場面である。バレエ教師の指示の下、踊り子たちが仕上げと確認を行っている。彼女たちの多彩なポーズが画面全体にバランスよく配置されており、右端にはリハーサルを見学する男たちがいる。なお、本作には複数の技法が混在しており、油彩のほかに水彩とパステルの痕跡も残っている。人工照明による陰影の効果や独自の質感表現のために試みられたと思われる。

○ **綿花取引所の人々(ニューオリンズ)1873年39歳**・・・1872年10月から1873年3月にかけて、ドガはアメリカのニューオリンズに滞在した。母親セレスティーヌの親族が綿花取引所を経営しており、そこに居た弟ルネから誘われて渡米を決意したのだ。本作は見事な群像構図で、事務所で忙しそうに立ち働く男たち、画面手前で綿花を点検する叔父ミシェル・ミュソン、画面中央で暇そうに新聞を読むルネなど、各々の人物の的確な描きわけが光る。従来の絵画ジャンルでいえば、集団肖像画と風俗画が混淆(こんこう)している。

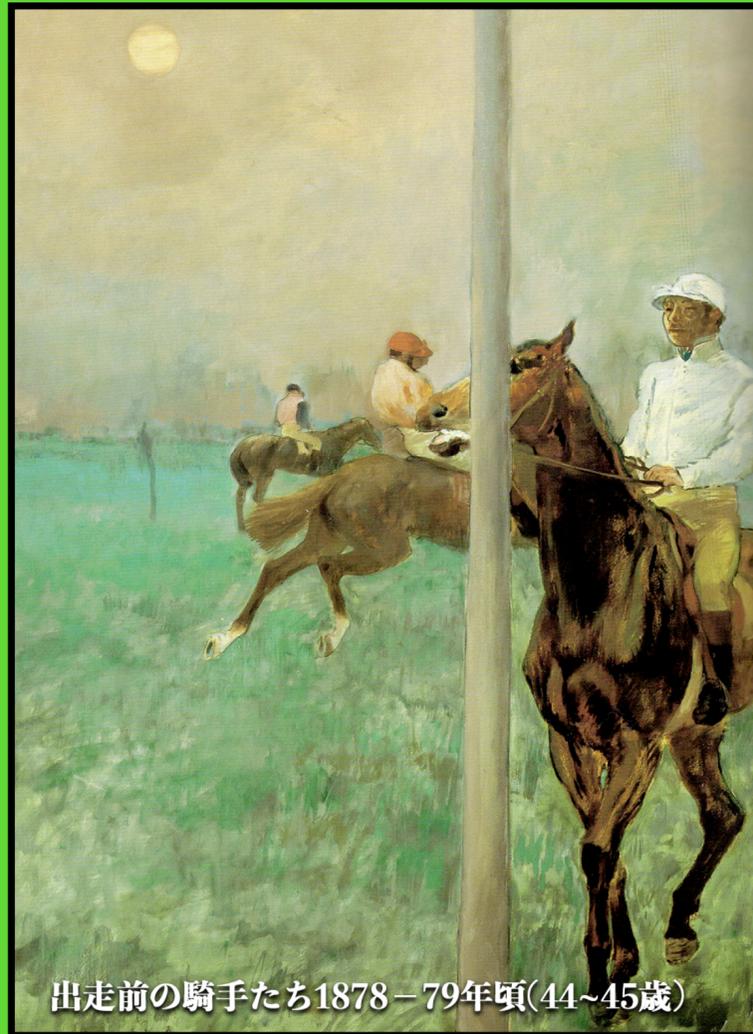
②-4(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

反ジャポニスム



○ 競馬の主題を扱った作品でも、本作はとりわけ構図が目を惹く。競走馬と騎手が斜め前後に連なり、重なって、手前右下で馬車と男性観客が大きくち切られるのは、かなりトリッキーな構成といえよう。ドガらしいこの大胆な構図には、日本の浮世絵版画の影響があるのだろうか。歌川広重の《名所江戸百景・高輪うしまち》などから刺激を受けた可能性はあり得るかもしれない。ドガ自身は決して自作のジャポニスム（日本趣味）を認めなかったのだが。

○ 歌川広重《名所江戸百景・高輪うしまち》1857年錦絵



出走前の騎手たち1878-79年頃(44~45歳)



ロンシャンの競馬場1871-74年(37~40歳)

○ **出走前の騎手たち1878-79年頃(44~45歳)**・・・競馬をテーマにしたもっとも実験的な作品の一つ。縦長の画面で、出走位置を示す柱が画面を分割し、主要モチーフを右側に寄せ、3組の馬と騎手が斜め奥に向かって重なり、**静と動の対比が瞬時性の印象を生んでいる**。右端でモチーフが断ち切られるという点で、《競馬場、アマチュアの騎手たち》と構造的に似通う。技法も凝っていて、油彩（油絵具をテレピン精油で希釈）にグワッシュとパステルを併用して、ややぼやけたような独特の色合いと柔らかな質感を出している。

○ **ロンシャンの競馬場1871-74年(37~40歳)**・・・1857年に建設されたロンシャン競馬場は、パリ西端に位置する**ファッションナブルな社交場**でもあり、ドガもよく出かけたに違いない。やや日が暮れ始める頃であろうか、トラック内を歩む馬群と騎手たちを後方から捉えており、**アトランダムな位置や動きがリアリティを高めている**。競馬をテーマとする作品では、比較的静かで落ち着いた雰囲気を示す。なお、本作は1903年にアメリカの美術館が初めて獲得したドガの絵画である。

②-6(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

独自の探究と試行



マネ《ロンシャンの競馬場》1867?年(35歳?)



ドガ《浴槽》1886年パステル・カルトン



ドガ《ロンシャンの競馬場》1873年

○ マネ《ロンシャンの競馬場》1867?年・・・ブローニュの森にあるケイバ上で疾駆する馬。ロマン主義の画家ジェリコー（1791~1824）の傑作以降、これほどまでにスピード感に満ちた競馬の情景が描かれただろうか。瞬間をとらえる感覚と主題の必然的な結びつきがマネを近代絵画のバイオニアに押し上げた。

○ "パステルの名手"は造形を追究し続けたドガ《浴槽》1886年・・・ドガこそはパステルの名手だった。18世紀に流行したこの技法は脆弱な素材のため、しだいに廃(すた)れたが、色の鮮やかさと繊細さに優れていたため、19世紀には再流行した。ドガの描く女性、いずれも鋭い、造形的実験の対象となっている。

○ ドガ特有の間合いで静的に描かれた競馬場ドガ《ロンシャンの競馬場》1873年・・・同じ競馬場を描いても、ドガは決して疾駆する馬の姿は描かない。構図には独特の間合いと空間の感覚がみられるが、これを浮世絵や写真の影響とするかは、意見が分かれるだろう。のちにゴーガンはタヒチで本作をもとに「海辺の騎手」の情景を描いた。

②-7(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

独自の探究と試行



「悪魔のロベール」のバレエ1876年42歳



ドガが描いた
チェリスト



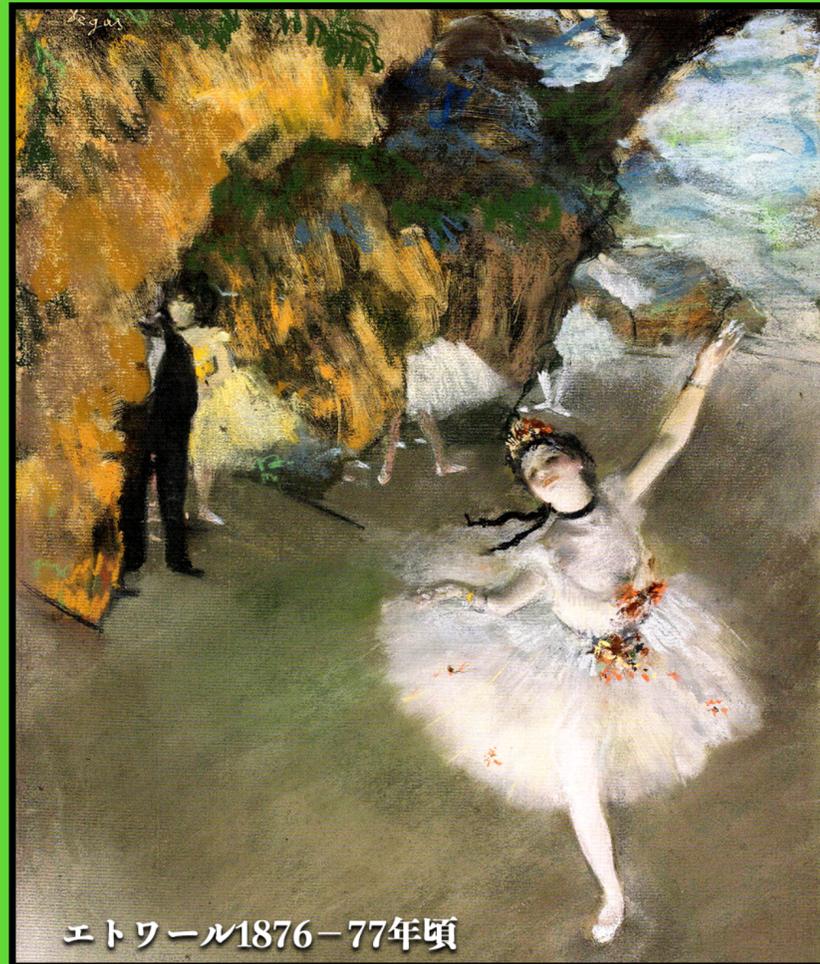
舞台の踊り子たち1883年49歳

○「悪魔のロベール」のバレエ1876年42歳・・・ドガは音楽好きで、オペラやバレエを観劇した。1885年にオペラ座の定期会員となったドガは、1892年までに177回足を運び、舞台裏にも自由に出入りできるようになった。ジャコモ・マイヤベーアの「悪魔のロベール」は19世紀フランスで大ヒットしたグランドオペラ。死んだ尼僧たちが墓から蘇って踊る場面はとても人気があった。だが、ドガの興味はむしろ、舞台と対比して表されたオーケストラの楽士たちや、オペラグラスをあらぬ方向に向ける男性観客などにあるようだ。

○舞台の踊り子たち1883年49歳・・・美しいパステル画であると同時に、舞台の踊り子を描いた作品の中で、もっとも複雑な人物表現の一つに数えられる。いったい画面に登場する踊り子は何人いるのか。顔が見えるのはぎりぎり4人だが、身体の部位だけが挿入されたバレリーナもさらに3~4人はいる。この凝った構成はドガの真骨頂としかいいようがない。ボックス席から見下ろしたような斜めの視角もまた臨場感を増している。

②-8(1870~1882年(36~48歳)・技術の追求と独創性

独自の探究と試行



エトワール1876-77年頃



「エトワール、舞台の踊り子」
ドガ 1876-1877年



合唱隊員たち1876-77年42~43歳

○ エトワール1876-77年頃・・・ドガのパステル画の代表作で第3回印象派展に出品された。オペラ座の花形バレリーナを担うエトワールが、舞台上でバランスをとった瞬間のポーズが見事に捉えられている。舞台を見下ろす視点で表し、踊り子を右下によせ、左上の部分には舞台装置、休憩中の踊り子、黒服のブルジョワ男性の姿を配する。華やかな踊り子と対比して、舞台裏とパトロンを思わせる人物を描くところに、ブルジョワ男性を配する。華やかな踊り子と対比して、舞台裏とパトロンを思わせる人物を描くところに、ブルジョワ社会の現実を冷静に見据える画家の眼差しがうかがわれよう。

○ 合唱隊員たち1876-77年42~43歳・・・ドガは1870年半ばからモノタイプとパステルを併用するようになる。モノタイプは金属板にインクで描いた図柄を紙に刷り取る版画の一種だが、同じものが刷れないので複製はできず、1点物の作品となる。《エトワール》や本作では、モノタイプの下地の上にパステルを塗っている。オペラ座の合唱隊を主題にするのはめずらしい。主役だけではなく脇役にも面白さを見つけるドガの目配りのよさを感じるが、ここでは照明が当たって濃い陰影を帯びる合唱隊員たちの多彩な表情に惹かれたのであろうか。

②-9(1870~1882年(36~48歳)・技術の追求と独創

踊り子の写実的な彫刻

ドガの彫刻



THE MET

○14歳の小さな踊り子
1878-81年44歳・・・ドガの生前に公表された唯一の彫刻で、1881年の第6回印象派展に出品された。オリジナルは臘製の像で、モデルとなったのは、**マリー・ヴァン・ゴータン**という名のオペラ座の踊り子であった。像のサイズは等身大の3分の2くらいで小さめだが、ポーズした姿は写実的に造形されており、バレリーナの**コルセット**や**チュチュ**、**靴下**や**トゥシューズ**を身につけ、**髪の毛はかつら**で、**リボンが結ばれていた**。当時は着色もされていて**(現在は変色)**、生々しいまでのリアリティを備えた彫像だったに違いない。



《14歳の小さな踊り子》1878年44歳



○踊り子を絵に描いていたドガが、1878年44歳頃に彫刻にしてみようと思いついたのは、**視力の衰えから触覚的なジャンルに手を伸ばしたから**。と同時に、**三次元の立体で踊り子を再現したい**という欲望に突き動かされた側面もあったのではないかと。本作は彫刻という範囲内に収まっているが、臘人形と混同されかねない危険な試みをドガが続けることはなかった。



《14歳の小さな踊り子》1878年-2



②-10(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

扇面とバレエ

ジャポニスムの流行

扇面・バレエ1879年45年

扇・農夫たち1885年51年

扇面・カフェ・コンセルの歌手1880年46歳

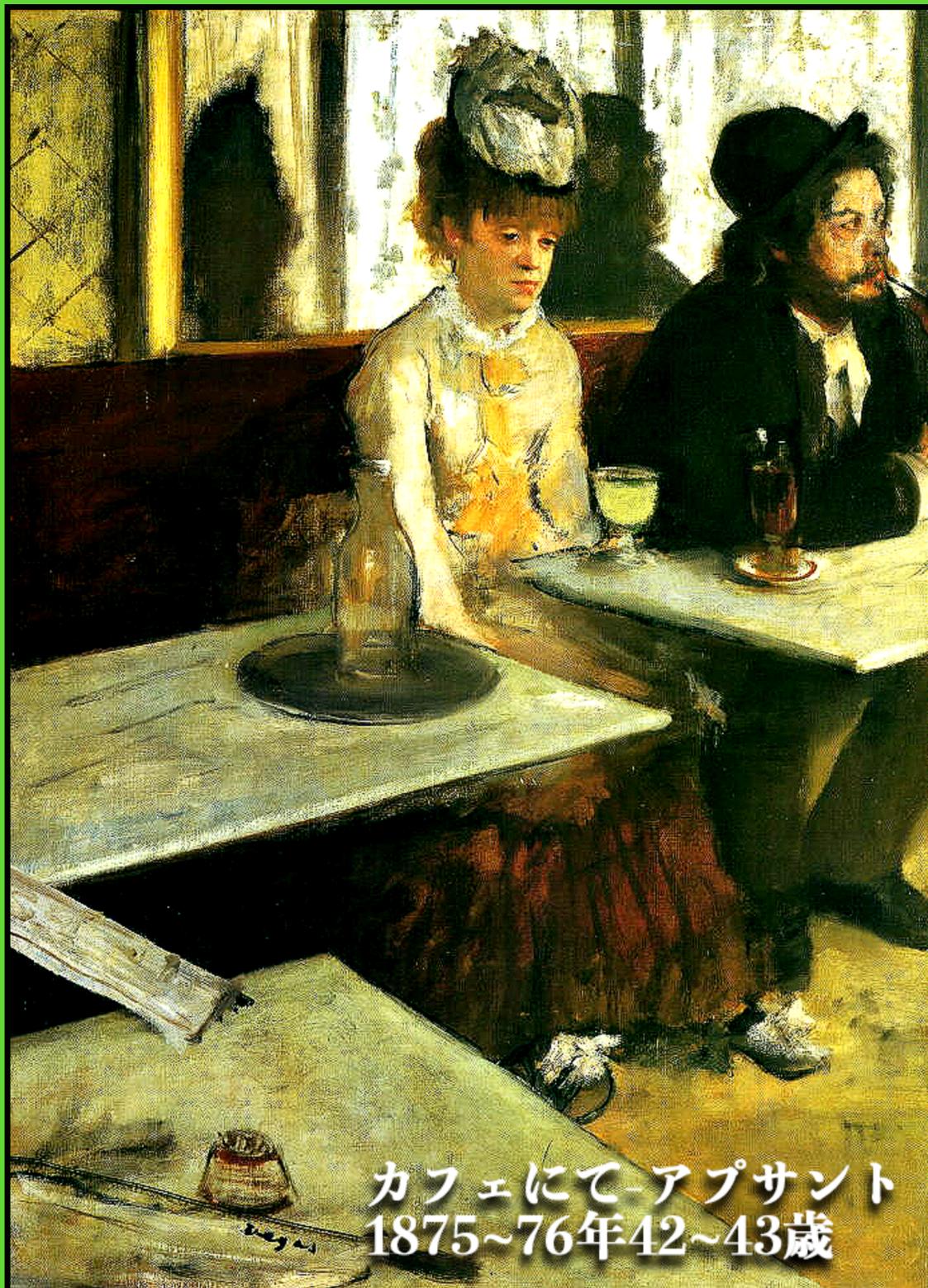
○扇面・バレエ・・・ドガの扇面画の大部分は1878年から80年の間に制作されている。おそらく、1878年のパリ万国博覧会の日本展示によって、パリでジャポニスムの流行が最高潮に達し、日本美術から刺激を受けたからと思われる。実際、ドガの扇面画は構図、色彩、筆触が絶妙である。湾曲した画面に踊り子と舞台装置を大胆に配し、水彩、墨、グワッシュによって思いがけない表現効果を出す。扇面という形式は、ドガの画風とぴったり合っていたようだ。

○扇面・カフェ・コンセルの歌手1880年・・・扇面画の主題としてはカフェ・コンセル（今のライブハウスのような店）の歌手もあって、こちらも洒落た構成の作品となっている。ここでも水彩やグワッシュによる少し澄んだり、ぼやけたりする効果をうまく使っており、背中を向けた歌手の挿入も気が利いている。なお、印象派の画家では、ドガのほかにピサロも扇面画を制作し、農婦などを描いているが、変わった枠組みを使うというよりは、絵画を扇状に切り抜いたかのようで、ドガ作品とは根本的に異なっている。

②-10(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性

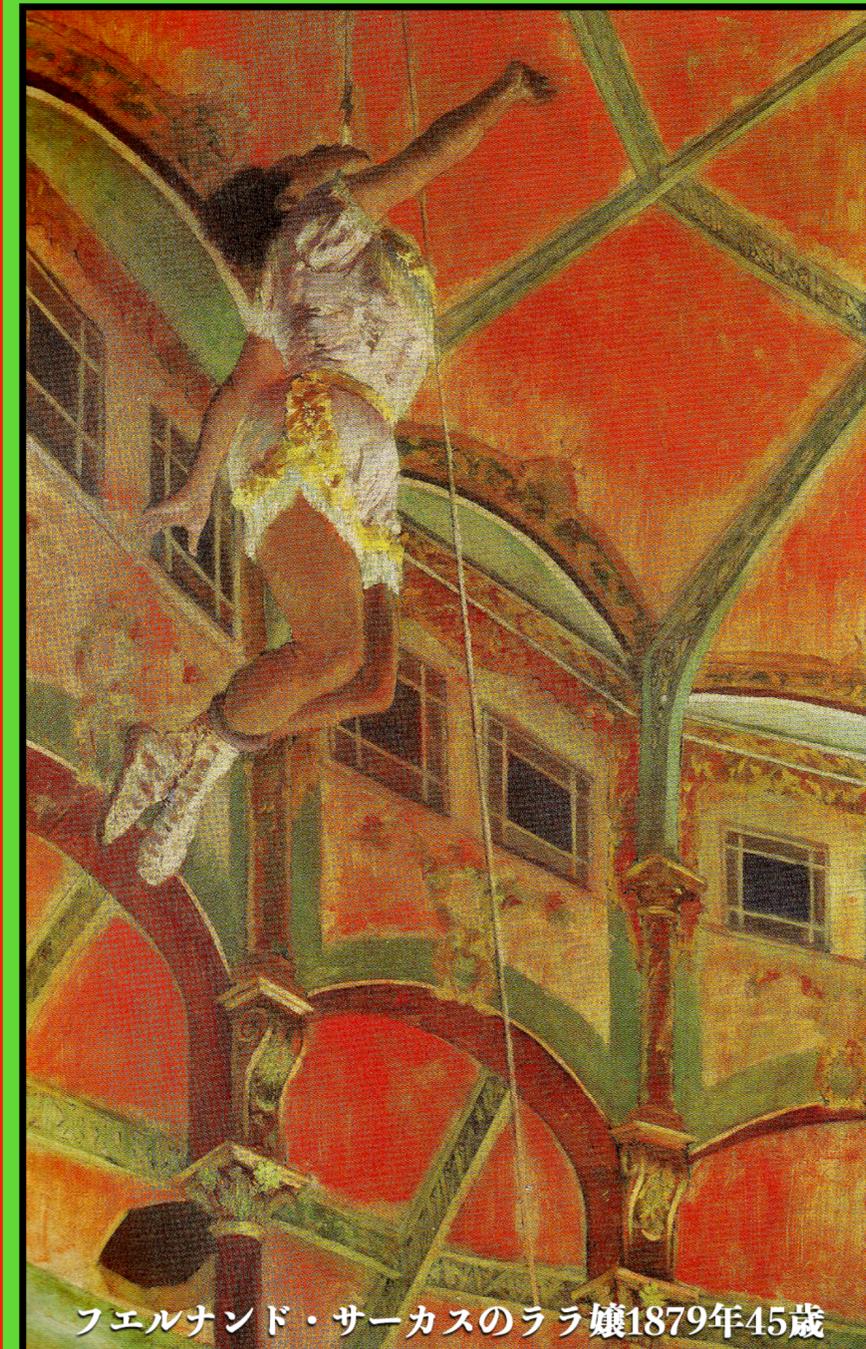
印象派のインスタグラマー!?

ドガ L'Absinthe
アフサンを解説!



カフェにて-アフサント
1875~76年42~43歳

○ **カフェにて-アフサント1875-76年**・・・
舞台はモンマルトルの丘の下、ビガール広場に面したカフェ・ド・ラ・ヌヴェール・アテーヌ。1870年代から印象派の画家たちの集いの場となった店である。テーブルに座るのはうらぶれた雰囲気のある男女だが、二人は視線を合わせない。娼婦であろうか、女の前にあるのが強い安酒のアフサント。モデルはドガの友人で、版画家のマルスラン・デブータンと女優エレン・アンドレである。斜めに折れ曲がっていく空間と意想不到的人物配置に、ドガらしい秀逸な切れ味を示す。



フェルナンド・サーカスのララ嬢1879年45歳

○ **フェルナンド・サーカスのララ嬢1879年**・・・
いかにして秩序立った絵画空間を崩して、かつぎりぎりの画面構成を保つか。ドガの絵を見るとそんな命題が浮かんでくる。本作は仰角の視点を斬新に適用したよい例である。サーカスの女曲芸師がロープの先の留め具を口でくわえたまま、空中に引き上げられていく。手を伸ばし、足を曲げて微妙なバランスをとる姿が左上に見える。オレンジ色の天井や壁を背景として、斜めのロープがピンと張り詰める様が心地よい。古典的な構図とは異なる緊張感を内包する作品である

②-11(1870~1882年(36~48歳)・技術の追求と独創性



犬の歌1876~77年42~43歳

○ドガの作品はもともと『カフェ・コンセール』というタイトルでしたが、描かれたカフェで歌う女性歌手「テレザ」の仕草が犬のように見えたことから、いつしか『犬の歌』というサブタイトルが付きましました。女性歌手が普仏戦争に敗れたフランス人の抵抗精神を歌っている。モノタイプを下地にパステルやグワッシュを併用するのはドガの得意の技法で、**下から照明を浴びて濃い陰影を帯びた姿が、鮮やかな新緑の背景から浮かび上がっている。**



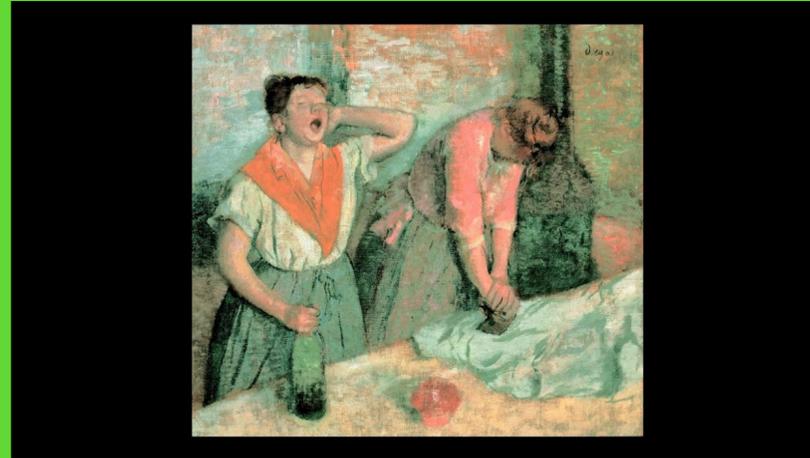
「夕暮れのカフェテラスの女性達」1877年43歳

○カフェテラスの女たち、夕べ1877年43歳・・・第3回印象派展に展示された本作は、娼婦たちが夕べに大通りのカフェテラスでおしゃべりしている場面を表す。ドガのアトリエは歓楽街ピガールの近くにあったので、このような光景は見慣れていたことだろう。彼女たちは四者四様の姿勢でくつろいでおり、**とりわけ親指の爪を歯に当てている中央の娼婦の姿が目立つ。**下地はモノタイプで、彼女の服に加えたパステルの青色が画面のアクセントになっている。

②-12(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性



エドガー・ドガ「アイロンをかける二人の女」(1884年)

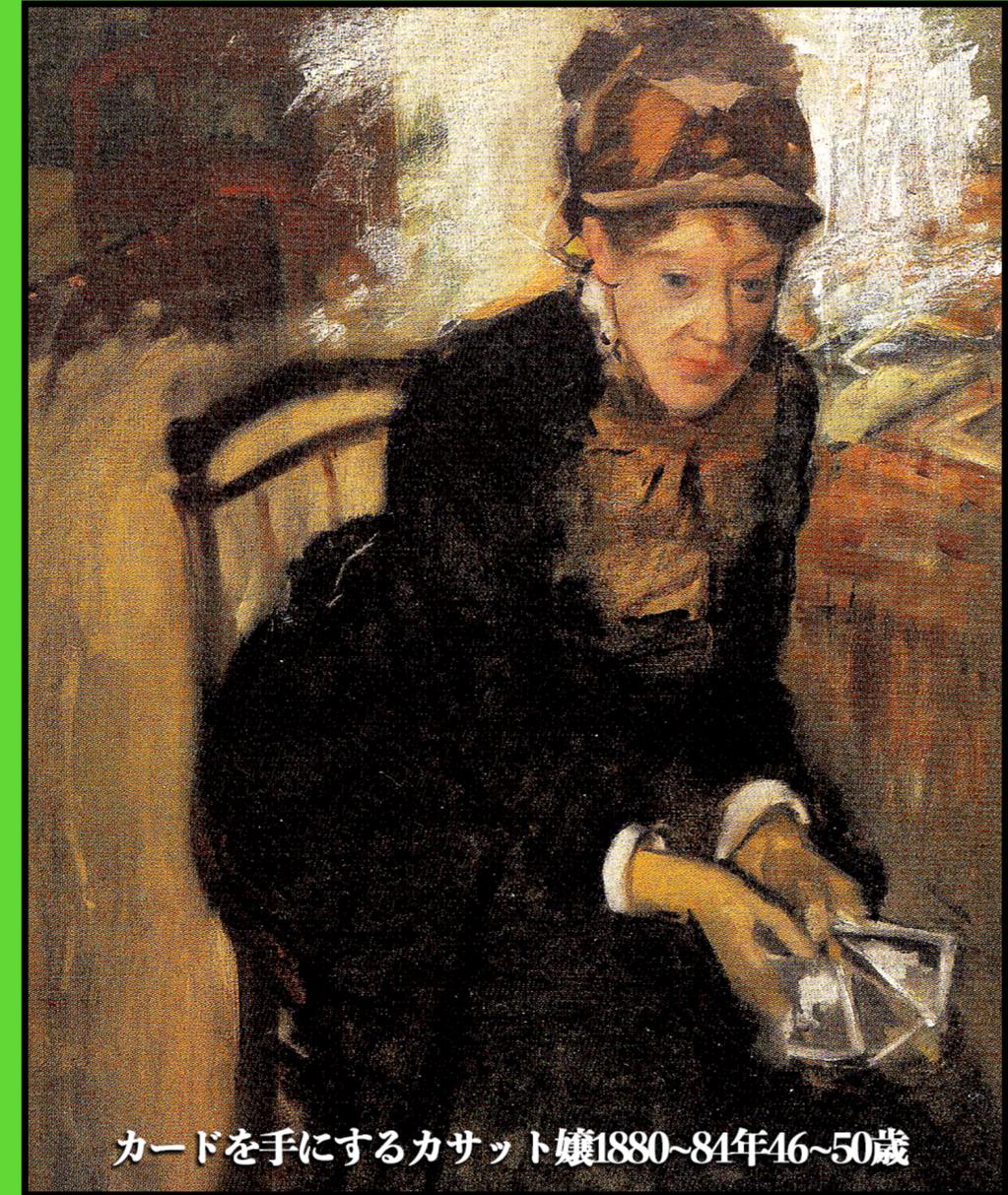


メアリー・カサット

ドガ愛謎
購入多?



印象派女性米国人
美術史名残す訳?



カードを手にするカサット嬢1880~84年46~50歳

○ **アイロンをかける女たち1884-86年50~52歳**・・・洗濯は当時の女性の職業の中でもかなりの重労働に当たる。重い洗濯物を抱えた二人の女性を正面向きと背面向きで組み合わせるとか、本作のように、力を入れてアイロンをかける女性と、瓶を片手にあくびをする女性を対照的に描くとか、さまざまな作品がある。ドガは踊り子とは違った意味で、洗濯女の姿勢やポーズに惹かれたのであろう。本作は、力を入れた身ぶりど、力を抜いた身ぶりの対比に関する興味が優っているように思われる。

○ **カードを手に座るカサット嬢1880-84年**・・・メアリーカサットはあアメリカ人で印象派の女性画家である。アカデミックな絵画に飽き足らなくなったカサットは、どがの斬新な絵画に魅了され、勧められて1879年第4回印象派展に参加した。ドガとの交流も続き、カサットは作品のモデルにもなった。

②-13(1870~1882年(36~48歳))・技術の追求と独創性



「婦人帽子店」ドガ/1879~1886年(42~52歳)



○ **婦人帽子店にて1879-86年**・・・労働に従事する女性たちで、ドガがよく扱ったのは婦人帽子店員と洗濯女であった。オーギュスト・ルノワールやジェイムズ・ティソの作品に見られるように、若いきれいな婦人帽子店員はブルジョワ男性の欲望の対象として、しばしば絵画に登場する。しかし、ドガはそれよりもむしろ、**形態や色彩の変化に関心があった**のではないか。上から見下ろす**多角的な視点**で表された本作でも、色とりどりの帽子が画面を活気づけ、華やかな空気をもし出している。

○ **奥行きが伝わるような対角線の構図**（赤色の罫線で印した箇所）が画面に安定感を与えていることがわかります。また、それぞれの帽子を結ぶ**三角形と逆三角形構図**（黄色の罫線で印した箇所）が上下にくっきりと形づくられることによって、テーブルや人物との位置関係も明確になってきます。さらに、その位置関係は**垂直線構図**（青色の罫線で印した箇所）と交わることによって、帽子の主題としてのテーマや存在感を明確にする効果も発揮しているではありませんか。三角形構図は画面上にいくつも連なっていて、無理なく視線を誘導する血管の流れのような役割も果たしているのです。

③-1・(1884~1917年(50~83歳))・多彩なメディアと実験

この時代のドガ	年齢	出来事
一八八四年	五十歳	二月、マネの作品を三点購入する
一八八五年	五十一歳	八月、ディエップ近郊に滞在。ウォルター・バーンズが《ドガ礼賛》(66頁)などを撮影
一八八六年	五十二歳	五月、第八回印象派展に出品 十一月、この頃にゴーギャンと親交
一八八八年	五十四歳	一月、ゴッホがドガの小規模な展覧会を開催
一八八九年	五十五歳	九月、スペイン、モロッコへ旅行
一八九二年	五十八歳	九月、デュランリリュエル画廊にて風景画を展示
一八九五年	六十一歳	二月、ゴーギャンの作品を八点購入する
一八九六年	六十二歳	八月、療養ためオーベルニュ地方を訪れる。この頃コダックの小型カメラで積極的に撮影する カイユボットの遺贈により、作品七点がリュクサンブール美術館に収蔵
一九一一年	七十七歳	四月、ハーバード大学フォッグ美術館でドガの個展開催
一九一四年	八十歳	ルーヴル美術館にドガの作品を中心としたカモンド・コレクションが収蔵
一九一七年	八十三歳	九月二十七日、脳溢血により死去。モンマルトルの墓地に埋葬



入浴・1886年52歳

○晩年のドガは新しい視覚メディアである写真に興味を持ち、1895年頃に小型カメラを入手すると自ら積極的に撮影し、作品制作にも活用した。自分自身や友人たちを被写体にし、設定や演出も凝っている。晩年のドガは孤独の中で、限られた友達とだけ交流した。画家としての評価は高く、作品も売れたが、最晩年を知るヴァレリーは述べる。「これはどまでに高貴な存在の、老齢による崩壊ほど、痛ましいことはなかった」と。死後アトリエには蠟製の彫刻群が多数残されていた。

○入浴1886年・・・1886年の第8回印象派展に出品された浴女シリーズ10点の中の1点で、俯瞰的構図のパステル画。ここにジャボニズムがあるとしても両者の差異もある。清長の浴女が銭湯を舞台として美人画の要素も備えているのに対し、ドガの浴女は私室におり多様な姿勢やポーズをとるとい違いはある。ドガの浴女の顔や表情がほとんど見えないのは風俗や女性美への関心の薄さを物語っており、浮世絵の享樂的なおおらかさに対して、浴女の造形を突き詰める点にこそドガの独自性がある。

③-2・(1885年(51歳))・多彩なメディアと実験



ウォルター・バーンズ《ドガ礼賛》(アングルくホメロス礼賛)のパロディー) 1885年

○巨匠アングルの作品《ホメロス礼賛》1885年51歳・・・のパロディーとして撮影された写真。ドガは1885年夏、親交のあったアレヴィ家に招かれてデュエップに3週間滞在した。そのとき招かれたイギリス人写真家が撮影した1点で、誰の発案かはともかく、**ドガ自身がホメロスの役**となり、周りの人物についてはアレヴィ家の人々の協力を得てできあがった。ドガの興味が演出された写真に向かう一つの機会になったかもしれない。



ポール・プジョー、アルチュール・フォンテーヌ夫人、ドガ1895年頃61歳

○ポール・プジョー、アルチュール・フォンテーヌ夫人、ドガ1895年頃61歳・・・室内の人物画のような面白い写真である。モデルはドガの知り合いで、趣味人の弁護士ポール・プジョー、アルチュール・フォンテーヌ夫人、それにドガ自身加わる。二人に対してドガは、片肘をつくわざとらしい気取ったポーズを与え、自身は夫人の方に身をかがめて話しかけるような姿勢をとる。全体に意味ありげだが、正確な状況は判然としない。

③-3・(1886年(52歳))・多彩なメディアと実験

ジャポニスム



鳥居清長《女湯》1787年頃錦絵



渡邊省亭

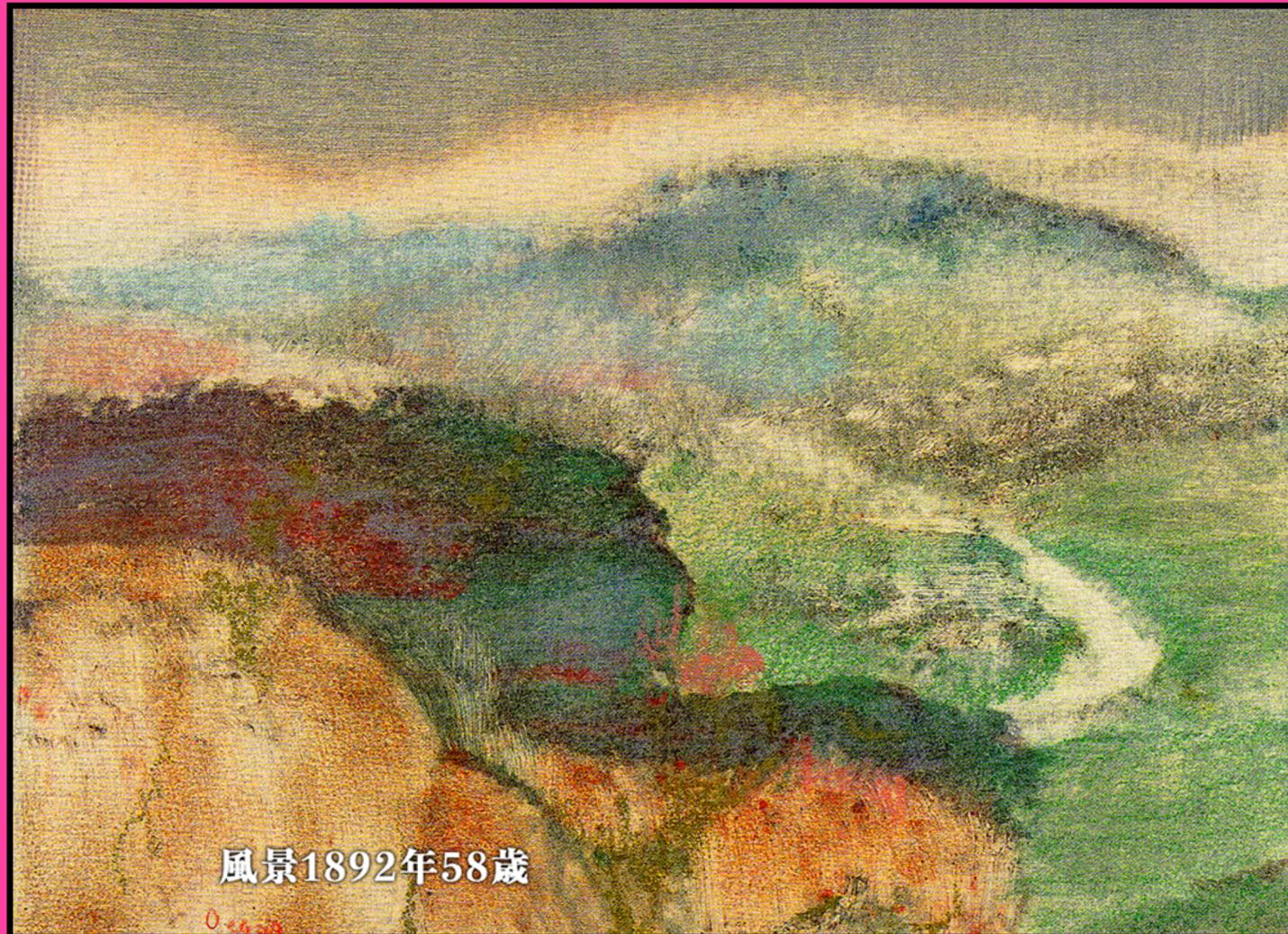


渡邊省亭《鳥図(枝に止まる鳥)》1871-1917年

○鳥居清長1787年頃錦絵・・・ドガの死後に行われた版画コレクションの売り立て(19-8年)には、清長、歌麿、広重、北斎など日本の浮世絵版画が100点以上含まれていた。実際、ドガが所蔵していた清長の《女湯》が、パステルによるドガの浴女のシリーズに影響を与えた可能性は十分考えられる。入浴する女性たちの多種多様なポーズという点で共通性が見られるし、加えて銭湯内の覗き悪から見る人物の存在は、浴女を捉えるドガの窃視的な視線と呼応するのではなかろうか。

○渡邊省亭《鳥図(枝に止まる鳥)》1871-1917年・・・作家エドモン・ド・ゴンクール日記によれば、1878年のパリ万国博覧会(44歳の時)の際に渡仏した日本画家渡邊省亭は、パリの日本美術愛好家たちの前で席画を披露したという。日本画の「掛け物」制作の実演にドガも同席していたというが、ドガへの献辞の入った本作は、このときの贈り物であろうか。技法研究への意欲旺盛なドガにとって、省亭との接触はまたとない機会となり、1878-1879年の扇面画制作にもつながったという推定はあながち無理ではなかろう。

③-6・(1892年(58歳))・多彩なメディアと実験・風景画の試み



風景1892年58歳

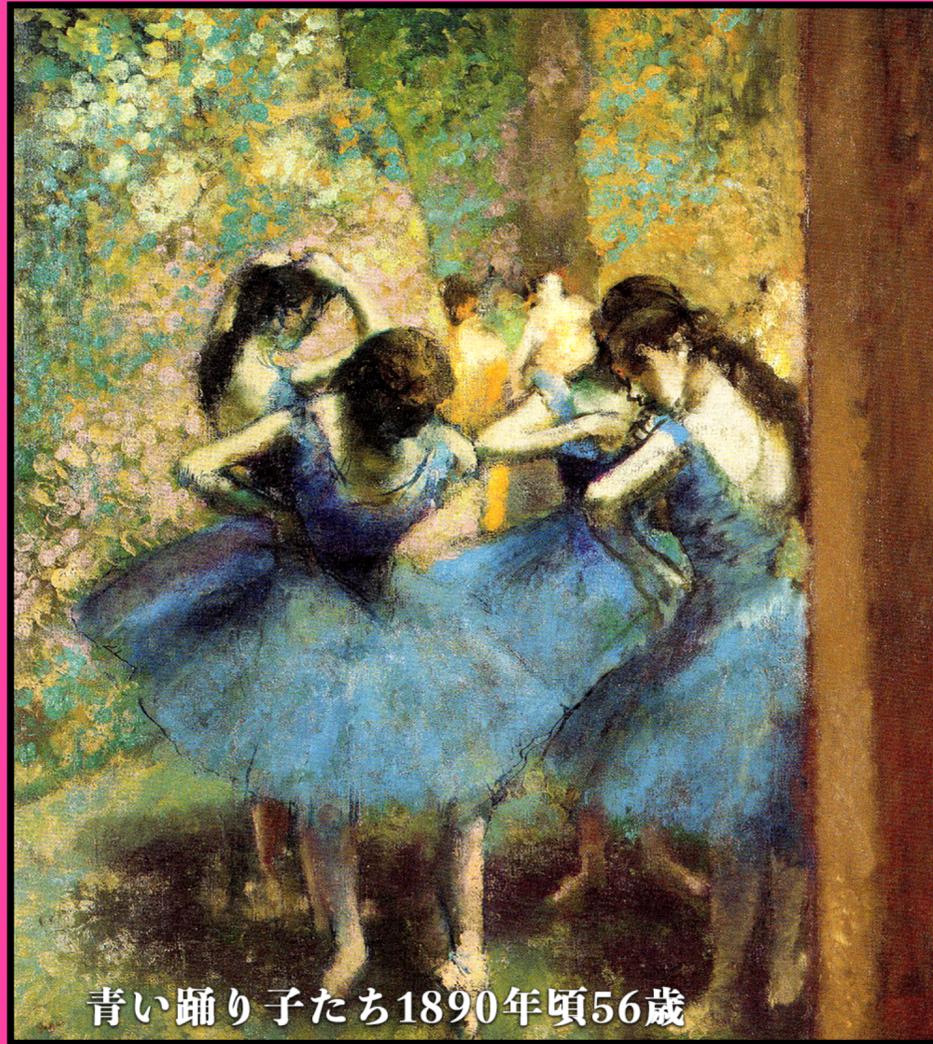
○ **風景1892年58歳**・・・全体に霞がかかったような淡い色合いだが、これは春の風景なのであろうか。紫、青、緑、茶に白がかかって、もわっとした空気感が表されている。しかし、これは油彩のモノタイプにパステルで加筆してできあがった作品にほかならず、**ドガの実験精神が生み出した風景なのである。**



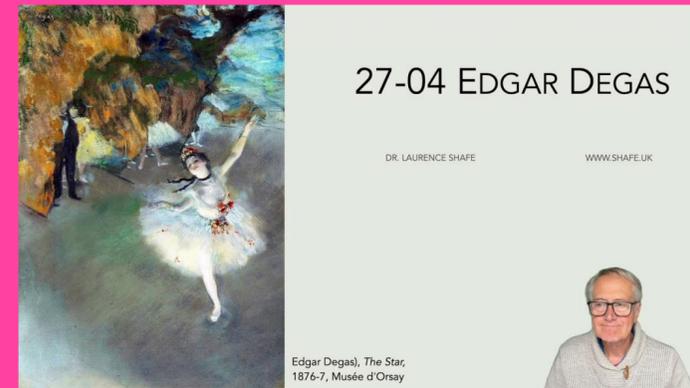
断崖・あるいは切り立った海岸1892年・58歳

○ **断崖、あるいは切り立った海岸1892年58歳**・・・海沿いの岸壁を表した風景画と見えるが、**岸壁に上向きで横たわる裸婦の姿が浮かび上がってくる。顔、胸、腰などを暗示する丘や岩の凹凸があり、髪は海の方に垂らしているという具合。**色彩の選択が絶妙で、**岸壁と人体がダブルイメージとして完全に溶け込んでいる。**自然からエネルギーを汲み取る人間のメタファーなのかもしれない。

③-5・(1884~1900年(50~56歳))・多彩なメディアと実験・新たな世界へ



青い踊り子たち1890年頃56歳



バラ色と緑色の踊り子たち1890年頃56歳

○ **青い踊り子たち1890年頃56歳**・・・4人の踊り子たちを描いた油彩作品。ドガは1890年頃に《**バラ色と緑色の踊り子たち**》を制作しており、それを踏まえて同じポーズを用いた本作は、踊り子の衣装を青に変えた。しかも、踊り子の数を減らし、**全体を単純化、抽象化し、色彩の強度や多彩な広がりを強調**している。それゆえ、青い衣装を着た踊り子ではなく、「**青い踊り子**」なのである。一人のモデルが4度異なるポーズをしたようにも見えて、腕の動きがかもし出すリズムが心地よい。

○ **1890年頃《バラ色と緑色の踊り子たち》**・・・この作品はドガがパステル画で描いた作品です。踊り子の少女のスカートはとてもふわっとした表現になっていて、その反面背中
の筋肉はとても力強く描かれていることがわかります。質感の描き分けがうまくできるのがドガ。柔らかなスカートと、力強い筋肉。それぞれの表現が素晴らしい。パステル画は、その特徴として柔かな表現になりがちです。それなのにドガは筋肉の力強さまでもパステル画で表現しているのです。

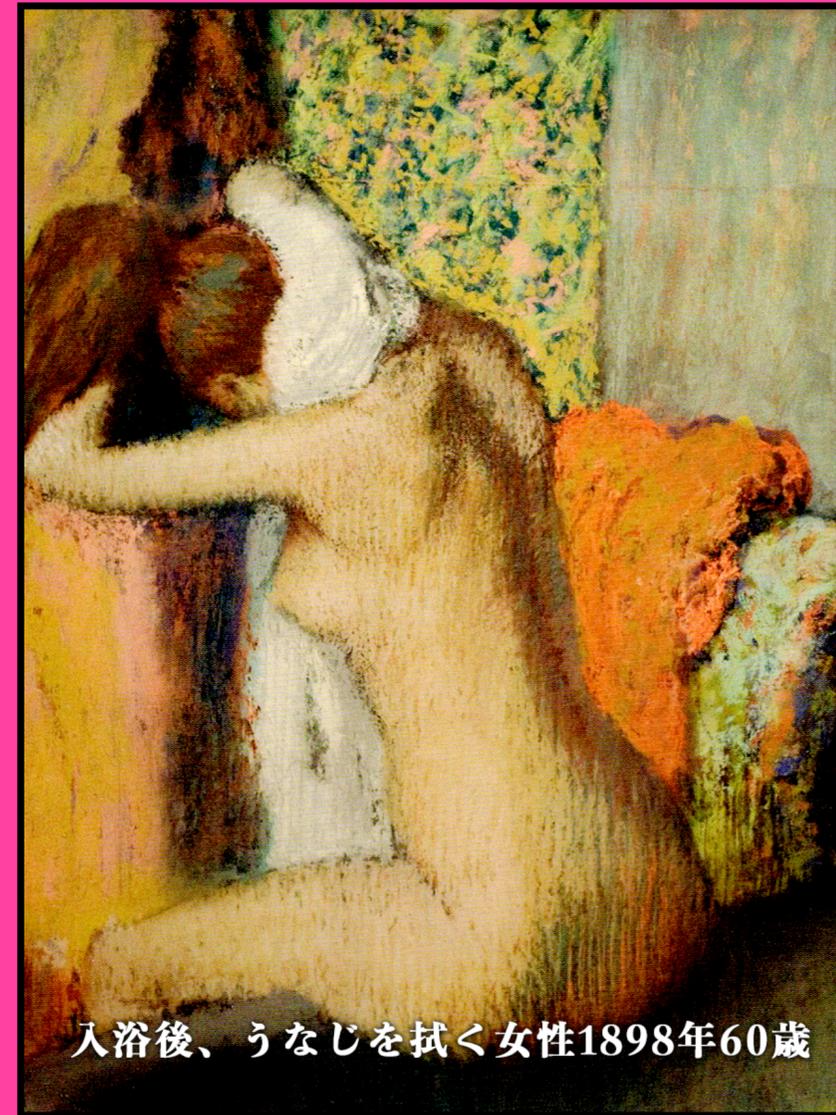
③-4・(1896~1898年(62~64歳))・多彩なメディアと実験



入浴の後1896年頃62歳



入浴の後1896年頃62歳(写真撮影)



入浴後、うなじを拭く女性1898年60歳

○入浴の後1896年頃62歳・・・1896年頃に制作された同じモチーフの浴女で、**写真の存在は油彩作品の出発点になったことが想像される**。入浴後に自ら身体を拭く女性の顔は見え、強い光の当たる背中と足が浮かび上がるというのは、かなり特異な設定とポーズで、ドガ自身が撮影した写真と推定されている。油彩の方は写真に基づいてはいるが、そのままではなく微妙に変化させ、**形態を単純化している**。オレンジがかった赤の色彩が画面に広がるさまは、**絵画の抽象化への指向を感じさせる**。

○入浴の後、うなじを拭く女性1896年頃62歳・・・ドガがパステルで描く「浴女」のポーズはさまざまに変化するが、入浴後に自ら身体を拭く場面もその一つである。浴槽の縁に腰かけ、前屈みになって髪を結んだ裸婦が、タオルでうなじを拭く姿が的確に捉えられている。背景にはソファや窓のようなものが見えるが、空間構成は曖昧で奥行きはあまり感じられない。パステル特有のマットな質感といくつかの中間色の組み合わせが、平面としての安定感を生んでいる作品である。

③-7・(1880~1890年(46~56歳))・残された彫刻群



○ **右脚を蹴り上げて駆ける馬**1880年代後半(50~60歳代)・・・馬の彫刻は、比較的静かな姿勢のものから、動きを正確に捉えたものへと展開していったようだ。エドワード・マイブリッジが撮影した馬の動きの連続写真を、ドガは1878年頃に見ていることが関係しているかもしれない。また、《右足の裏を見る踊り子》は日常的にあり得るポーズだが、身体のねじれを含んだ面白いバランスを示している。こちらも周囲のあらゆる視点から鑑賞したくなる作品である。

○ **残された彫刻群「絵画制作のために」**・・・ドガが生前に公表した唯一の彫刻作品は《十四歳の踊り子》で、1881年47歳の第6回印象派展に展示された。ところが、ドガの没後に、そのアトリエで150点あまりの「踊り子」や「馬」の彫刻群が発見された。すべて蠟製で、劣化したものも多かったが、内73点がドガの友人で彫刻家のバルトロメによって修復された。後にブロンズに鑄造され、ドガの彫刻作品として蘇ったのである。もともと、視力の衰弱とともに、ドガは油彩からパステルやモノタイプに移行しつつあったが、いつ頃からか、触覚的に造形できる彫刻も取り入れていたことがわかる。残された蠟彫刻は「踊り子」と「馬」が大部分を占め、ドガにおける訓練された動きへの興味を物語るが、ただしそれだけではない。

ドガの彫刻

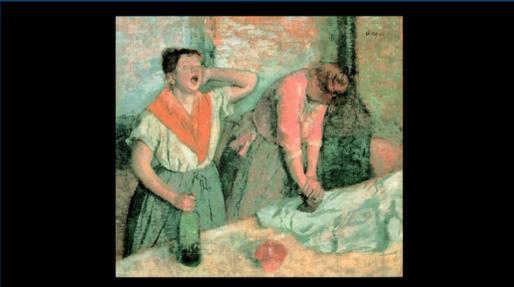


《右足の裏を見る踊り子》1890年代頃

○ 《**右足の裏を見る踊り子**》・・・日常的にあり得るポーズだが、身体のねじれを含んだ面白いバランスを示している。こちらも周囲のあらゆる視点から鑑賞したくなる作品である。

YOUTUBE

ドガの彫刻



「ルノワールの美少女、実写化」
「美しすぎて言葉を失う...」

山田五郎の切り抜き
ボタリを100年先取り!
ドガ先輩の唯一の彫刻

浮世絵と印象派をつないだ男 前編
ドガ

ドガが描いた
チェリスト

Edgar Degas
Little Dancer Age Fourteen
VMEFA

ドガってどんな人?
絵に隠された性癖って?
ドガの嫌な側面とは?
彫刻の作り方が気持ち悪い?
ドガについての解説まとめ

眩しがり症が彼の作品を生んだ?!
エドガー・ドガの
あまり知られていない10の事実

3分でわかるドガ
古典主義を受け継ぐ印象派の初期メンバー

捻くれ者の謎多き絵画!?
エドガー・ドガ
『室内』を解説!

THE MET

メアリー・カサット
ドガに心酔!?
フェミニスト
大注目画家

19世紀画家シリーズ
エドガー・ドガ
君に教えよう!
私が踊り子推しのワケ

印象派のインスタグラマー!?
ドガ L'Absinthe
アブサンを解説!

特別展解説
オルセー美術館所蔵
印象派
室内を巡る物語
第1章 室内の肖像

画家の生涯
ドガ

Paris

舞会の裏側にひそむ詩情

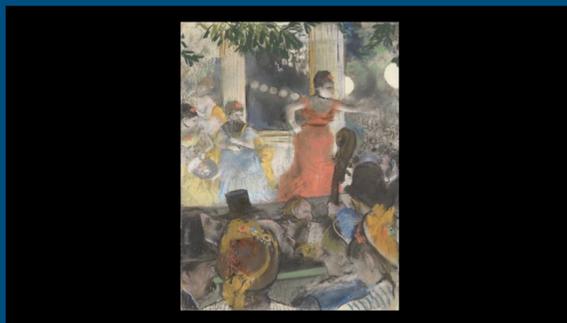
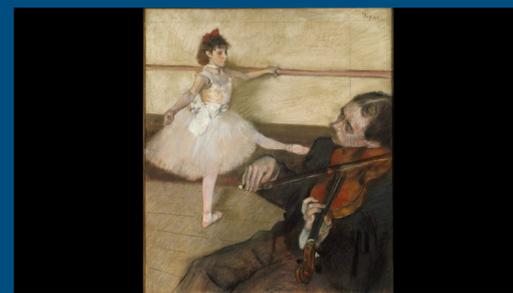
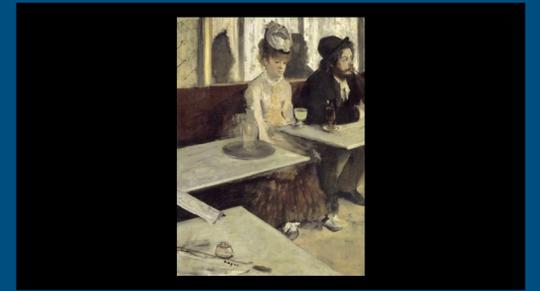
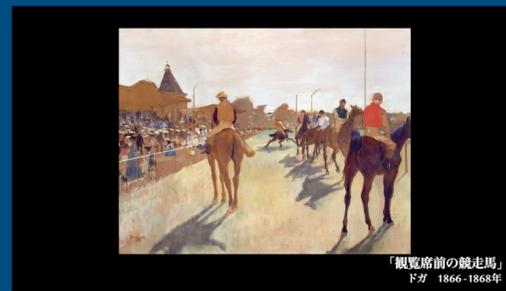
【舞台上のバレエのリハーサル】
エドガー・ドガ
メトロポリタン美術館所蔵

ドガが描いたパリの孤独と
禁断のアブサン

「エトワール、舞台の踊り子」
ドガ 1876-1877年



YOUTUBE



- 今日のテーマ

「ドガの人生と作品を探る」について
いかがでしたか。感想をお願いします

- 次回のテーマのご要望を承りますので、
忌憚なくお話しください。

- 次回お会いできますこと、楽しみにしています。